

---

# ダンジョンのエレベーターボーイ

エーシュルング

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダンジョンのエレベーターボーイ

### 【Nコード】

N2512J

### 【作者名】

エーシュルング

### 【あらすじ】

ダンジョンのエレベーターボーイ。彼の仕事は、冒険者を地下深いダンジョンへと迅速に、確実に送り届けること。  
都市の地下の、危険な職場の物語。

## 第一話 92階層

暗黒のダンジョンの底目がけ、エレベーターの籠は恐ろしい落下を続けた。いよいよ暗さはその深みを増し、大地の奥底でうめきを発する地獄へと到達するかと思われる寸前、エレベーターの鋼鉄の箱は減速した。

金属がこすれ、火花が飛び交う。その甲高い音にエレベーターの籠の中の人間の腸がよじれた。籠は骨格を大きくふるわせ、完全に停止する。エレベーターの籠は疲労したかのように、鋼鉄の皮膚に空いた体腔から熱い蒸気を吹き出した。だが、エレベーターの操り手はその白いもやもやしたものに一切かまわず、腕を伸ばしてがらりとエレベーターの籠の格子扉を開けた。

ここが街の地下にある類のただの暗がりなら、突然の闖入者に驚いて灰色のネズミが駆け回るか、あるいは天井の一角にて蝙蝠の一団が赤く目を光らすことだろう。

だが、ここはダンジョン。  
ここにわだかまる闇は、現世に知られる全ての闇と比してなお、真の闇と呼ぶにふさわしい。

空気は生暖かく、血の味がする。ダンジョンに住まうは黒の客。その気配はやすりのように肌に痛かった。いかなる魯鈍な生き物として、ここを宿にはすまい。近づこうとはしまいで。

だが、呪われているかのような好奇心を持ち合わせたただ一つの種族、人間だけは違った。

「92階層だ」

エレベーターの操り手は、しわがれた声を出した。

エレベーターの籠のたどり着いた広間は古く、およそ滅多に人の訪れるべき場所ではないことを示している。それゆえか、時の摩耗さえもこの階層は寄せ付けていなかった。

油のつきぬランプが様々な場所で赤々と輝いていたが、炎の色も

地上とは違う。血よりも暗い赤だ。その雰囲気は聖堂のように静かだが、それはダンジョン自らによって装われた見せかけに過ぎない。エレベーターの操り手は眼窩の影の奥、用心深い目を光らせ、広間の果ての壁を見やる。床から天井まで届く二十人長ほどの巨大な92という文字が、エレベーターの籠が正しい場所に着いたことを示している。

「ここまで冒険者が着たのは久方ぶりだ」

エレベーターの籠の中から乗客がゆつくりと出てきた。いかにも冒険者風の二人組だ。

一方の男は古い赤銅色の具足に、眉までを覆う円形兜。その下の顔は、古兵というほど老けてはいないが、眼はあまりにもものを斬りすぎて、ひどく疲れた憂鬱な紫だった。

左手には大盾を担ぎ、そして、右手には大業ものの姿があった。その刃は主人同様疲れた感じの曇った色だ。十人の男が十分に乗り込める広さのエレベーターの籠は、この大剣のおかげでひどく狭いものに思えていた。

その剣士の相棒は鎖帷子の上に青の戦衣を羽織った女だった。樺色の羽飾りの着いた兜をかぶり、猫のような黄色い眼は喜びに光っている。二本の曲刀が両腰にあった。

二人の冒険者はぶらぶらと広間に進み出た。手練特有の優雅な身のこなしで、ダンジョン制覇に備えた重武装にも関わらず不気味なほど物音は立てない。

男はギール、女はシャルナといった。

「ここが92階層？」

「……なんか大したことななさそうな階層だな」

二人はそう言い、直後、ダンジョンが反発するかのようにごろごろ音をたてた。

だが、二人はそんなことではびくともしない。

「本当にそんなに高レベルな階層なのかい？」

シャルナはエレベーターの操り手にそう尋ねたが、びくともして

いないのはこの操り手も同様だった。

「安心しろ。このモンスターには賢いのが揃っておる。少なくとも、前回ここに冒険者どもを運んで時には揃っておった」

「前回つてのはいつなんだい、エレベーターボーイ？」

エレベーターボーイと呼ばれたエレベーターの操り手は骨張った力強い手で頭をがりがり搔いた。

「三年前だな。90より下の階層となると、そんなものだ。どいつもこいつもびびりおうて、およそ誰も近寄りませぬ。俺の生きてる間に100階層に挑もうとするのが出てきてくれりゃ、エレベーターも動かしがいがあるのだがな。三年前の挑戦者の骨とが見つけて持って帰ってくれば、企業組合ダンジョン管理部は喜ぶはずだ」

エレベーターボーイの言葉に、シャルナは嬉しそうな笑い声を漏らした。危険なダンジョンがお好みらしい。

世間ではダンジョンは深い階層、つまり数字の大きいものほど難易度が高いとされているが、実際には生息するモンスターどもの傾向やダンジョン内の環境、構造などによって誤差が生まれた。

「ま……帰りの荷物が少なければそうするよ」

ギールが言つて、大剣を気だるそうに肩に乗つけた。

「この階層を制覇したら、呼ぶがよい。数分で来てやる。エレベーター呼び出しボタンはあそこだ」

エレベーターボーイは広間の一角にぼつんとたたずむ石碑を指した。

ダンジョンの全ての階層にあれと同じものがあつた。

「こんな深い階層にもちゃんとあるんだね」

「その通り。俺自身も行って見たことがあるわけではないが、ダンジョンの最下層、100階層にもこれは設置されているという。これはダンジョンにエレベーターを設置した者の偉大さを表す事柄の一つだ」

エレベーターボーイの口調には誇らしげな響きが混じっていて、それを上手く隠せていないようだったが、女剣士はふうんと相づち

を打っただけだった。冒険者にとってダンジョンのエレベーター設備は大した興味の対象ではない。

「それでは行ってくる。ああ……」

ギールはエレベーターの籠に置かれた宝箱に目をやった。二人の冒険者がつい先ほど、準備運動代わりに55階層を制覇した際の戦利品で、階層のボスのモンスターを殺して奪ってきたものだった。長い時をダンジョンの暗黒の下で過ごしてきたはずなのに、この宝箱には劣化や腐食といったものが見当たらなかった。

「持ち歩くのもしんどい……預かっといってくれないか？」

「俺のエレベーターを貸し倉庫代わりに使うか。よかるう」

「金貨一枚ほど払おうか？」

「金が欲しくてこの仕事やってるわけではないぞ」

冒険者二人は宝箱に関して、不必要にエレベーターボーイを疑ったり、脅したりしなかった。

エレベーターボーイが冒険者の中で特に一流の二人に敬意を表しているのと同様、二人もエレベーターの主に敬意を表しているのだ。この男なしで冒険者がこうも地底の奥底に下りてくることなどできはしない。

二人の冒険者はモンスター待ち受けるダンジョンの奥底へと消えていった。

ダンジョンのもやがたちまち生命の痕跡すら隠してしまった。

エレベーターボーイはエレベーターの籠を地上へ上げる準備にかかる。こんなダンジョンの深みでぐずぐずしているのは、危険だった。クラルクを回し、操作舵を上下する。エレベーターの籠が、空気を求める肺のように震え、その中は製鉄所のように騒がしくなる。エレベーターの発聲準備が済んだことを告げるベルが短く鳴った。ダンジョンの奥から剣の金属音、何かがぶつかったり、叩き付けられたりする音に混じって、人の怒鳴り声と、モンスターの鳴き声が響いてきた。

二人の冒険者の声は切羽詰まっているように聞こえるのは気のせ

いか？　これほど深いダンジョンの闇の中では音もねじ曲げられてしまつてうまく伝わらないのかもしれない。

誰かが魔法を使ったのか、どすんとくぐもつた爆音がして、壁のランプの炎が一斉に揺れた。

だが、それでも、モンスターはひるまないのか、それとも新手が来たのか、モンスターたちの声が大きくなる。

爆音に対抗するかのように、放電の音が聞こえた。モンスターたちの方にも魔法を使う奴がいるのだらう。92階層なら十分に考えられることだった。

エレベーターボイは右手を舵棒に置き、左手で格子扉を掴んだ。「地表に上がるとするか……」

ダンジョンの奥は魔法と白刃ひらめく場となり、それはどのような戦場と比べてもひけをとらない、恐ろしいものだらう。だが、いつまでも続くわけではない。やがては、ダンジョンに巢食うモンスターの陣営か、武装して少人数で侵攻していく冒険者たちのどちらかに底が見えてくるはずだった。

エレベーターボイは耳をすませる。

耳に親しんだ、もつと上の階層にて、初心者冒険者が階層の入り口付近で、実力以上の階層に入ってしまった、しかももう万事は手遅れだということに気付いた時にあげる、絶望の悲鳴を無意識のうちに聞き取るうとする。

一流の冒険者であるギールとシャルナも断末魔というのを上げるのだらうか？　それとも、そんなことをしてわざわざモンスターを喜ばせはしないのか？

だが、爆発音と金属音はまだ続いた。

エレベーターボイは計器類の中の、刻時器の文字盤を指で叩いた。

「五分経過。三年前の挑戦者はもう死んでいた頃だらう。あの二人なかなかやるではないか」

二人が途中で力つきれば、また90階層以上に挑戦するほどの腕

利きが現れるのを三年待たねばならないのだろうか。だとしたら、つまらない。

92階層の、想像を絶するボスを倒して、階層を制覇するのは無理だとしても、せめて生きて脱出してくれば、エレベーターで急行して拾い上げてやるのが可能なのだ。

だが、エレベーターボーイの期待通りに事が運ぶのは難しそうだった。

この深みにあるダンジョンはあまりに難易度が高い。まるで人間が立ち入ることを禁じる法則でも働いているのではないか、と信じなくなるほどだ。

ダンジョンの奥では戦いの音が高まり、誰かの雄叫びのあと、爆音が起きた。

「回避だ」

エレベーターボーイは舵棒をがごと倒し、地表からエレベーターの籠を吊るしている途轍もない長さのケーブルが火花を散らして巻き上げられた。

爆風がダンジョンの回廊を吹き抜けてきて、エレベーターの籠の外壁をびりびりと震わせた。

エレベーターボーイは熱風に顔をしかめながら、ダンジョンの奥を見やる。だが、意味あるものは何も見えない。

いまの爆発は戦いのけりを付けたのか、戦闘の音が無くなっていた。

「ゲームオーバー……か？」

エレベーターボーイはつぶやき、格子扉をどしんと閉めた。

エレベーターの籠がシャフトを上昇し始めても、しばらくは92階層の照らされた広間の床が見えていた。だが、それも上昇が急上昇に変わると、オレンジ色の点へと変わり、すぐに見えなくなった。



## 第二話 時代の変遷ならびに画期的輸送機関エレベーターについて

これはエレベーターの操作に、まだ専門的な技術が必要だった時代の物語。

拡張の時代であった。

世界の未知の場所は次々と探られていく。地図も盛んに書き足されていった。

数多くの冒険者が困難な、実現不可能と思われた探索を達成し、誰もがそれを賞賛した。

探索は横だけでなく、縦の方向にも行われた。

遺跡の地下や、大洞穴のさらなる奥、あるいは人の生活する活気にあふれた街の地下にさえもそれは存在していた。

ダンジョンと呼ばれる暗黒の間である。

ダンジョンはモンスターが巢食い、この世の理の通じぬ、地獄への門というべき闇の世界だった。

昔から、ダンジョンに眠る秘宝を求めて、あるいはその邪悪な住人を退治するため、武装した冒険者一団が攻め入ることは時たまあったことで、生還した者はその経験を後の世に伝えた。

やがて、拡張の時代が訪れると、ダンジョンの闇でさえも、人の作り出した光で照らされるべきだという考えが一般的になった。

いまや国中の攻略困難なダンジョンへ毎日、冒険者達が入っている。それはビジネスにまで発展するほどだった。

冒険者をダンジョンまで送る足として、新たな乗り物が脚光を浴びた。

力強い熱水機関エンジンをシャフト上部に備え、頑丈な箱に冒険者を収めて、地下深くへ駆け下りていく。

他のいかなる乗り物とも似つかぬそれはエレベーターと名付けら

れ、高度な操縦技術を身につけたエレベーターの馭者である男女はエレベーターボーイと呼ばれた。

### 第三話 0階層

朝。二人の男がダンジョンへの入り口、エレベーター乗り場で茶を飲んでいた。

街は騒々しく動き出そうとしている。ダンジョンへの道を開いた企業組合の露天のロビーは、早くも人でごった返している。ダンジョンに冒険者が集まることは同時に色々なものを呼び寄せていた。

物々しく武装し、少人数ごとに固まっているのは冒険者だ。彼らは手に持つ槍の石突きで敷石を叩き、あるいは火筒の弾や、矢尻を削っていた。ローブを着た謎めいた雰囲気のある男女は魔術を専門にした冒険者で、属性が何であれ、魔力の続く限り、彼らの攻撃魔法は砲兵一分隊の戦力を提供する。また、治癒魔法を習得した僧侶も、パーティーにいと心強い存在だろう。

一人で行動する冒険者は希だった。そういうのはど素人か凄腕かのどちらかだ。そして、多くはダンジョン探索の才能以外なら取り柄を持ち合わせていない風吹鳥の雰囲気をもとっていた。

床の上では商人が兜を並べ、研ぎ師や整備士が客を待っている。他にも、伝道者、勧誘商人、あるいはそれ以外の冒険者にメッセージを送りたがる連中。腕のいい冒険者ならダンジョンの外でも職にありつける。

企業組合の運送用重エレベーターの扉が開き、疲れ果てた労働者の大群が休憩のために出てきた。夜明けから企業組合所属の施設の隅々までエネルギーを送るための過酷な労苦にさらされるにもかかわらず、彼らの賃金は雀の涙ほどもない。

熱水機関の発展は信じがたいほど大きな機械を動かすことを容易にし、そのため田舎にて、手で物を作っていた人々は職を失った。一つの巨大機械が都市の工場で産声を上げること、村単位で失業者が生まれていく。

多くの人々が、餓死か、それとも都市内でひどい仕事を見つける

かの二択を迫られた。

そして、都市の生活は光に満ちている。光にひきつけられる羽虫のように、今日も大勢の人間が雪崩こんで来ては、都市を形作るピースを増すのだ。

ダンジョンの冒険者にして、小柄なシーフ、ホロンは上を見上げた。

頭上五十メートルの高架をけたたましい音と共に、石炭と魔法の炎から生み出されるパワーをまとった汽車が走っていく。客車の中のみならず、客車の横や上にも客が鈴なりになっている。

都市は人間を取り込んで成長する巨大な生物に思えた。産み出されるエネルギーはさながら都市の血管を走る熱い血液だ。汽車の高架の横では新たな高架を増設するためのクレーンがゆっくりと鉄骨を吊り上げていた。

架橋だけではない。ホロンの頭上ではいたるところでものが作られ、煙霧に汚れた危なっかしい足場を金槌を持った大工が走り回っていた。

急激な人口増に対処するために都市は横のみならず、上の方向へも広がっていかねばならないのだ。

先日は街のために新たな川が作られた。百棟もの家々が川に押し流されたが、かわりに一万人のための水が手に入り、実行者の企業組合に賞賛が寄せられた。

なるほど、企業組合は強引な統治者かもしれない。だが、統治者とはそういうものだろう。商人たちが統治を始める以前の、悪名しか残さなかった王たちの治世と比べれば、企業組合の統治は実に単純で理にかなっている。都市住民はそう思うことだろう。企業組合は気まぐれを起こしたりしない。その目的は彼らの利益にのみで、それゆえ分かりやすい。

この急激な、そして無秩序な都市の成長が止まる時、街はどのような姿になっていることだろう、とホロンはすでに多くの人によってなされたに違いない事柄について想像を巡らした。

「なんてやかましい機械だ。無粋で、下品で、怠惰にまみれておる。まったく反吐が出よう」

ホロンの想像を、口汚い罵りが打ち破った。

ホロンの向かいに座る男が、忌々しげに頭上を睨んでいる。

「汽車も、あんたのエレベーターも似たようなもんだろ、エレベーターボーイ？」

ホロンは言った。

男はエレベーターボーイの名で知られていた。

「所詮は動く方向の違いだ。いや、あんたのエレベーターは横方向にも動けたな。じゃあ、あんたのエレベーターは汽車だよ。そういうことだ、汽車ボーイ」

「黙れ。俺のは、かように煙を吐いたりはせぬ」

エレベーターボーイはぶつきらぼうに言った。無論、ダンジョンの中でエレベーターが煙なんか吐いたら、それはひどいことになるだろう。

世の中にエレベーターボーイは数多けれども、ホロンの前にいるのはエレベーターボーイの中のエレベーターボーイと呼ぶべき男だった。エレベーターボーイという仕事は、汽車を進める操作よりも技術が必要とされ、そしてダンジョンに設けられたエレベーターはそれ以外のエレベーターよりも遥かに危険な職場だった。血に飢えたモンスターは冒険者だろうと、エレベーターボーイだろうと、區別はしないのだ。ダンジョンのエレベーターを長く操っているものは、大胆さや、職業の知恵を兼ね備えているはずだ。

ホロンの眼前のエレベーターボーイは企業組合13号ダンジョンのエレベーターの主。

彼が受け持つ階層、その数は百。

ホロンの知る限り、それはあらゆるエレベーターボーイの中でも最高の数字だった。

エレベーターボーイは細面の男で、長年暗黒の地下で過ごしすぎたのだろうことをうかがわせる風貌だ。顔には刻まれたような傷に

まみれ、手足は蜘蛛の脚のようにひよる長いが、軟弱な感じは全くなく、むしろ余分なものを削ぎ落とした感じだ。

汚れたつなぎを着て、さして強くもない陽光に目を細めているこの男の名は、本人でさえ知らないのかもしれない。誰もが職業名で彼を呼ばざるをえなかったが、本人もエレベーターボーイと呼ばれることにやぶさかでない様子だった。

ホロンとエレベーターボーイは、夜通し続いたギールとシャルナの92階層制覇を祝うパーティーから出たあと、ここで日の出を待った。

ホロンは新聞を一枚手に取り、新聞紙のまだ乾いていないインクが手を汚すのを見て、口をへの字に曲げた。

「まったく、インクつてのは嫌なものだね。私はもうインクなんか使ってないよ。最近発見された瀝青炭から抽出されたパラフィンという蠟で手紙を書いているんだ」

「蠟で？ 正気か」

「文字を溶かせば、何度でも紙を再利用できるからね。ものを作るには原材料が必要だし、その量は有限だ。近いうちに世界もそれに気付いて、私を見習うかもしれない」

「ありそうもない話に聞こえるがな」

「ああ、そうそう、今朝の新聞は読んだか、エレベーターボーイ？」

「あとで読む。一種類だけを」

「少な過ぎる」

「エレベーターボーイは素朴な職業で、それで事足りるのだ、こそ泥殿」

ホロンの前には新聞の束があった。シーフは情報を武器に生きる職業だ。複雑化された社会では様々な点から物事を観察して、そこから策略を立てて生きのびねばならない。そして、時の流れもホロンの味方だった。印刷技術は発達し、情報はかつてなく早く伝わる時代となりつつあるのだ。

ホロンは確かにシーフだし、企業組合のダンジョン管理部にもそ

う登録していたが、自分はただの世間一般に認識されている、いわゆる二枚舌のこそ泥よりも大物だろうと考えていた。

相手がモンスターだろうが、冒険者だろうと、あるいはそれ以外の一般人であつてさえ、策と、腕前さえあれば盗めないものなどないのだ。そこには独特の定理があつた。そのために、ホロンには敵が多いが、それもまた生活に勢いをつける事柄だ。

ホロンは最近、自分をプランナーと呼んでいる。だが、残念ながらそんな名のジョブは登録することができなかった。

ホロンは一枚の新聞を広げた。

「見る、これを。西方の都市で新式の熱水機関が開発されて、特許を取つたようだった。いま街で使われているものの二倍の効率だよ」

「悪いが、大して興味をそそられぬ。エレベーターの籠をひっぱるケーブルは確かに熱水機関で巻き上げられるが、俺のエレベーターの籠がやるのはそのケーブルにしがみついたり離れたりするだけだな。俺と熱水機関に直接の関わりはない」

ホロンは興をそがれる。

「毎度のことながら、私がどんな話題を持ってきても反応薄いな」  
「俺がエレベーター以外愛せないことを知らなんだか、こそ泥殿？」  
「こそ泥じゃない。プランナーだ。とにかくなにか仕事以外にも趣味を持つとうよ。奇抜なアイデアって奴はまったく異質のジャンルが融合して生まれるものなんだ」

「なぜに俺のエレベーターに奇抜なアイデアが必要なのだ？」

ホロンは嘆息してその話題を切り上げることにした。だが、すぐに顔を上げ、げっ歯類のように悪戯っぽく目を光らせて言った。

「エレベーターボーイ、エレベーターを失つた後、どうやって生きていくか考えてみたらどうだい？」

「馬鹿を言うな」

エレベーターの声はモンスターのうなり声のようだった。

「俺がエレベーターを失うなんてことがあつてたまるか」

#### 第四話 ダンジョンとエレベーター、両者のもたらず競合作用

ダンジョン。

エレベーター抜きだと、冒険者たちは途方もない長さの階段を上り下りせねばならず、移動だけで彼らは疲れ果ててしまい、もうダンジョン制覇の余力など残りはしない。

一方、エレベーターは一日三交代制の大勢の労働者と熱水機関抜きでは、ものすごいパワーをまとってダンジョンを縦横に駆け下りることなどできない。一昔前は人力や、水力のエレベーターが使われていたが、それも今は昔。今日ではそんなのろろと動く代物は顧みられることはない。

時代は加速しているのだ。

遅いエレベーターというのは、利用客のみならず、エレベーターボーイにとっても我慢ならぬ、ストレスの源にかなりえなかつた。



## 第五話 日常的階層

ダンジョンの法律的な所有者で、開発主任でもあるダンジョン・マスターの激励の声が、頭上の建物から伝声管を伝わって下りてきた。

建物中のエレベーターが動き始める。

冒険者たちー彼らはさらにダンジョンに潜る目的によって、モンスターハンター、マップメイカー、トレジャーハンター、コレクターなどに分類され、そしてレンジャー、アーチャー、ウォーリアー、シーフなどに、得物、戦法、ライフスタイルによっても分類された。

彼らはエレベーターに乗って暗黒の世界へと下りていき、不運で未熟な者はそのまま帰ってこない。

エレベーターボーイは、ここ数日、毎朝姿を見せる、熱心な冒険者を20階層へと下ろし、そして新品の鎧に身を包んだ五人組を9階層に下ろした。蛮族風な趣深い鎧の二人組は16階層へと行き、プロ拳闘士のような出で立ちの男たちはトレーニングと称して、ほとんど手ぶらで4階層へ行った。

昼前には見知った顔がやって来た。三年ほど前からこのダンジョンに集中しているボンダーという頬髭を生やした大男で、嵩張る丸い盾と彼の身長ほどもある長斧を使った。

今日はさらに綱や火鉢、食器といったものまで装備している。

「新しい戦闘スタイルを思いつきでもしおったか？」

エレベーターボーイがエレベーターの入り口に置かれた使用済み切符入れの樽を磨きながら尋ねると、

「ノー」

ボンダーは首を振った。

「食事のためだ。と言っても、モンスターを食べるのではない。以前、7階層の回廊にタマネギを植えておいた。そろそろ大きくなっ

「ているはずだ」

「なるほど。ダンジョンの中でモンスターを成長させているなんらかの作用が、タマネギにも働いておるかもしれんな。それにモンスターはタマネギを食わんから、案山子を立てる必要もないとのことか」

「そして、その後には奥の水路で魚を捕る。あの水路にはダンジョンの奥のどこからか、魚がまぎれ込むんだ、知ってたか？ 魚はダンジョンの中では弱り、すぐに死にじまうが、おかげで捕るのは造作もない」

ボンダーは調理用ナイフで宙になにか描きながら言った。

「魚は近所の地底湖から来ておるのだ。同様の水路はいくつかの階層にあるぞ」

「なに！？ そんなの知らんぞ！ それはどこだ！ 教えてくれ！

頼む！」

ボンダーは懇願した。この男はダンジョン内の魚釣りスポットのハンターも自称しているようだった。

「あとで俺の部屋まで来るがよい。適当な値段で売ってやるう」

エレベーターボーイは言った。冒険者よりも長くダンジョンで過ごすエレベーターボーイは、ダンジョンの側面に関して冒険者よりも知識を多く持つということが多々あり、こういった情報はいい収入となる。

「だが、しかし、ダンジョン内の魚やタマネギで生きていかなばならぬほど、おぬしは貧乏でないはずだぞ」

「ああ。だが、最近の急激な人口増のおかげでなじみの定食屋もタベルナ屋台も大行列。どこも三時間待ちよ」

「気の滅入る話よな」

エレベーターの籠の中の鐘が鳴った。エレベーターシャフト上部のケーブル制御機構内で、労働者たちが交代を終えたのだ。

「出発だ」

細身のエレベーターの操り手と、大男の冒険者はエレベーターの

籠へと歩いていった。

「タマネギの収穫が済んだら、次は豆でも植えてみることにしよう。二刻ほどしたら迎えに来てくれ。そのまま腹ごなしに50階層に向かう」

「よかるう」

ボンターはエレベーターの籠の敷居をまたぎ、切符をエレベーターボーイに渡した。

「一日エレベーター乗り放題のエレネットを買わぬか？ 数多くの階層を行き来する場合はいちいち切符を買うよりか、お得ぞ」

「おいおいエレベーターボーイ！ 商人みたいな口ぶりだぞ！」

ボンターが大声で大きさに嘆いた。

「このダンジョンの中に商業の害悪を持ち込むとは！ ダンジョンとは冒険者にとって職場で、生き甲斐である以上に、聖域であるともいうのに！ エレネットだ？」

「少し金を稼いで、エレベーターの発達に貢献せぬかと、投資を始めようと思っただけのことよ。西方都市で新たな熱水機関が開発されたというし、それが実用化され、導入されれば俺のエレベーターはより優れたものとなる。おぬしのダンジョンにタマネギ埋めるよりはかはましな試みに思えるぞ」

「誰の入れ知恵だ？」

「ホロンだ。シーフの」

「シーフか！ まったく堪え難い連中だ！ まったく堪え難い！

ウオオオオオ！」

ボンターはウォーリアーで、つまりは戦士なのだが、彼は自分を特に怒れる狂戦士バーサーカーと称している。冒険者には自分を大仰な称号で呼び、呼ばれたがる者が多い。

彼は自分の称号の正しさを証明するかのようにその場で怒り狂い、武器を振り回しはじめた。エレベーターボーイは別に驚きを顔に表はしない。これはこの大男の準備運動のようなもので、多くの腕のいい冒険者がこういったものを必要としていた。エレベーターボー

イ自身がエレベーター操作の前に行く入念なチェックと似たようなもので、精神統一を目的としているのだ。

「ウオオオオオオオ！」

だとしても、そう広くもないエレベーターの籠の中をびゅうびゅうと長斧の刃が飛び交うのはエレベーターボーイを落ち着かない気分させる。職場であるエレベーターの中で、こういった邪魔が入ることは、エレベーター操作の妨害になりえた。

エレベーターボーイは自身のエレベーター操作に常に完璧な物を求めるのだ。

彼は籠を急降下させて、ボンダの体を宙に浮かせて彼の怒りに水をさすと、7階層に着いた途端、大男を籠から蹴りだしてしまっ

た。  
それからしばらくの間、主シャフトを人間の怒声がこだました。

## 第六話 一つの職場に二つの職種という現状と、起因するすれ違い

冒険者たちの質問にこういうものがある。

エレベーターボーイよ、エレベーターの操作ばかりで退屈ではないのか、冒険者と一緒にダンジョン攻略をしようとは思わないのかと。

エレベーターボーイは全くそうは思わなかった。

剣を振るう。呪文を唱える。化け物を切り刻み、焼き滅ぼす。そういう行為になんの興味も見いだせない。

彼のエレベーターが万全に作動しているときこそエレベーターボーイは幸せなのだ。

変な男だ。冒険者たちは彼を評価する。

そしてエレベーターボーイもまた彼らを同様に評価している。

だが、エレベーターボーイはダンジョンという危険な職場に魅了されていたし、その点のみで冒険者たちと共通点をもっていた。

## 第七話 64階層（行）

エレベーターボーイはエレベーターの籠を走らせ、シャフト壁面に敷かれているレールの具合を確かめていた。レールはダンジョン内を高速で駆け回るのに不可欠なもので、レールが考案される前の高機動エレベーターはたびたびシャフト壁面にぶち当たり被害を出した上に、横方向へ移動するために大変な労力を要した。

ジーツと音がしてブザーが鳴った。籠の中の円形表示板には0から100までの数字がびっしりと描かれているが、今、針は0を指している。

次の冒険者が地上でエレベーターを待っているのだ。

エレベーターボーイの指示に従い、籠はがたごと上昇を始めた。

高度計の針がぐるぐる回転する。

いささかスピードがすぎたことをエレベーターボーイは認めた。籠の、レールを掴む力を強め、ブレーキをかけた。

火花がやたらめったらと散り、騒音は百人の狂った僧が金切り声でなにかを詠唱しているようにひどいものになった。だが、エレベーターボーイにとっては慣れたもので、毫も動じない。

衝撃とともに、エレベーターの籠は0階層、つまり地表へとたどり着いた。

ダンジョンの中の作られた光ではない、白い陽光がもやの向こうからエレベーターボーイの目を貫きにやって来た。冷却水が灼熱したブレーキに吹き付けられ、もうもうと湯気が上がる。

エレベーターボーイは計器の上、エレベーターの停止とともに動きを止めた刻時機を指で叩いた。

「三分八秒。ふっ、そう悪くないタイムよ」

格子扉を開けて外に出ると、客たちが啞然としながら立っていた。金属の閃光とともに地底の底から雷のように出現した籠。

スピーディーな現代であってさえ、これほどの速さで上下する乗り

物はそうは存在しない。

「で、何階へ？」

エレベーターシャフト内に立ち入るべからず、と書かれた床板を踏みながらエレベーターボーイは尋ねた。

客は二人組で、新顔だった。

「64階層で」

「……まあ、構わぬが」

この二人はお世辞にも64階層ほどの深みで通用する腕利きには見えなかった。だが、こういう時代だ。エレベーターボーイは客の行きたい階層へと運んでやることにしている。

「切符を」

二人がさつとエレネットを見せたので、今度はエレベーターボーイの方が驚いてのけぞる。

「俺以外にも、まったく偶然に似たようなお得な切符システムを始めたエレベーターボーイが他にもいるわけか？」

「エレネットは先日、技術関連の雑誌にあるプランナーが投稿した案で、それが色々なエレベーターで採用され始めているのですよね」  
女の方の客が言った。

ホロンはエレネットのアイデアを街中にはらまいたわけか。

奴がエレベーターボーイへ直々に導入を勧めに来た理由も明白だ。エレベーターボーイもそれを始めたのなら、それはエレネットにとってこの上ない宣伝となることだろう。

利用されたことを知ったが、自身にとってもそれなりの利益をあげるだろうことから、エレベーターボーイは怒りをおさえた。

客の、男の方はケラルムでウォーリアー。女の方はシフィエラでプリーストと名乗った。二人とも異人種のようなようだった。おそらくは海の向こうの東洋のなんとかという大帝国からの移民か、旅人だろう。

エレベーターの籠が降下を始めると、シフィエラは種らしきものをざつと床にまいて、それを手にとった。

「噂できいたけど、ダンジョンの中で植物栽培の実験が始まったんですってね？」

「実験？ あれがか？」

エレベーターボーイは顔をしかめた。ボンダーのタマネギ栽培のことを指しているのか？

「……まあ、そういう噂も聞くな」

「で、私たちは今日、ダンジョンにトマト、キュウリ、セロリ、その他食用の野菜を数種類植えてみるんですよ」

エレベーターボーイがよろめいた。

このダンジョンで作物を育てようと考えること自体、驚きで、常軌を逸していると思えた。たしかに、ボンダーの件以外にも、ダンジョン内でタマネギや食べれる地衣類などが育つことがあることを、エレベーターボーイは知っていたが、そういったタフな植物でさえ、この闇の中では虚無に取り込まれてしまいがちだ。

虚無に堕ちた存在は動物であれ、植物であれ、我々光の生物とは異なる場所に属するものへと変化を遂げる。ダンジョンに済むモンスターも、その祖先が虚無に堕ちるまでは人間の家畜だったとしても、あるいは人間そのものだったとしても不思議ではない、とダンジョン関係者の間で考えられていた。

そのため、冒険者はあまり長くダンジョンに浸るのを避けたし、エレベーターボーイもまた然りだった。

「……せいぜい頑張ることだ」

「我々の種はチェンホー大学の農学部から借りて来たもので、長年の交雑の結果、驚くべき品種改良がなされているそうだ」

ケラルムが低い声で言った。

「きつとダンジョンの中でも十分に育っていつてくれるはずですね」  
シフィエラが東洋人特有のさえざるような物言いをした。

肝心な点は、ダンジョンがただ薄暗い小部屋などではなく、歴史の始まる以前の大昔になんらかの禁じられた主題のために掘られた、なかばこの世と異なった世界であることにある。



タマネギやニンニクは古来より魔を遠ざける作用があることを知られているが、トマトやキュウリにはそれが無い。そういった野菜を手に狼男や吸血鬼と戦う英雄の物語は聞かない。トマトやキュウリはダンジョンの闇の影響をもろに受けるのだろう。

そう遠くなく、落胆が二人を襲うことを予想できた。

だが、エレベーターボーイはいちいち説得してまで、二人を止めようとはしなかった。

エレベーターボーイのことをよく知らない人は、彼を無口で不親切な人間だという評価を下しがちだ。実際には、それに加えてエレベーターボーイには無意識のうちに、酔狂な試みから生まれる、あらゆる種の芸術を賛美する傾向があった。

よかるう、ダンジョンにトマトやキュウリを植えるがよい。

「データのためにはなるだけ多くの階層に植えなければいけないわね。とりあえず、手始めに64階層にお願いしますね、えーつとー」

シフィエラはエレベーターボーイの胸の名札を見ようとした。エレベーターボーイは名札なんかつけていなかった。

「俺のことはエレベーターボーイと呼ぶがよい」

「でも、エレベーターボーイってのは職業名ですね」

「うむ。だが、俺以外のエレベーターボーイは皆、名を名乗るゆえ、俺がエレベーターボーイと名乗ることにはいかほどの問題もない」

エレベーターボーイは断言した。

「でも、おまえ、ボーイって年齢にゃ見えないぜ」

ケラルムが薄く笑って言う。

「エレベーターアダルトってところか？」

「エレベーターミドルエイジマンの方が的を射ていませんかね、ケラルム先輩？」

「おお、うるさい」

エレベーターボーイは普段より大きな音をたててエレベーターを操作して、客の声を耳から閉め出した。

60階層を過ぎたところで、エレベーターボーイは籠の落下のスピードを落とした。ここでエレベーターの籠のつかむレールを変え、地上からつながるケーブルを切り離した。

そこからは横穴の、緩やかに傾斜したレールを滑っていくのだ。

ダンジョンは非常に複雑な形状で、主シャフトの他にこういった横穴はいくらでもあった。

「落下の角度が変わってるぜ」

「横穴にはいった。俺のダンジョンのシャフトは蜘蛛の巣のごとき複雑さで、俺はいつも最短の道を選ぶ。一本道のシャフトしか持たぬエレベーターなんて物はエレベーターと呼ぶに値せぬな」

「すごいな……単にエレベーターするだけじゃないのか」

ケラルムは表情を変えなかったが、その声は驚きを表していた。

「ああ、エレベーターってのはエレベーターの語源の言葉ってのを知ってるか？ エレベーターはエレベーターの第二文型所有依存格でな。二世紀ほど前に共通言語が伝わってくるまでは、この大陸の誰もがそういった雅な言葉を話していたのさ」

ケラルムが知識の一端を披露したが、エレベーターボーイの反応は冷たい。

「そんな事を知っていてなんの足しになる」

「ケラルム先輩は言語学科で学内有数の成績を収めたんですね」

「くだらぬな。ダンジョン内にてそういう知識は無意味だ。モンスターへの爪と牙を防ぐのに必要なのは、勘に運や判断力、素早さであるよ」

ケラルムは挑戦的にくつくと笑った。

「我々は知識で常識を覆さんというわけだ。まあ、見てな。我々はモンスターを分析して、弱点を見つけ出す」

「そして、階層にトマトやキュウリを沢山植えて、そこからさらに大量のデータを手に入れますね」

妙に自信にあふれた二人組は64階層に下り立った。全ての階層同様、ここにも壁に巨大な64という数字がある。

「トマトやキュウリを植え終えて満足したら、そのエレベーター呼び出しボタンを押しな。数分で来てやる」

シフィエラが、過去に64階層を制覇したマップが作ったに違いない地図を取り出した。

「それから、地図をあまり信用し過ぎぬことだ」

エレベーターボーイが忠告した。

「マップだつてプロだろう？ いい加減な仕事はしないはずだ」

「だが、ダンジョンは成長してある。少しずつだが、常にその形は変わっていく」

「馬鹿言え」

「信じる信じないは勝手だ。だが、俺もプロだからいい加減なことは言わぬぞ」

二人は半信半疑の表情だが、すぐに気付くはずだ。

エレベーターは冒険者たちを置き去りにして、新たな横穴をおりて、主シャフトを目指した。

## 第八話 ダンジョンの更なる付記。都市の問題点を自宅にて黙考

実際ダンジョンは成長している。

人を見ていないところで、音もなく、少しずつ、広がっていく。古くなり劣化した区画は、これまた静かに壁に吸い込まれて消えていくという。

ダンジョンは冒険者を食べて新陳代謝を行う獣で、都市の地下に潜む病魔であった。

とは言え、都市はダンジョンから直接の被害を受けたことがなかった。ダンジョンはあまりに深い場所に位置し、水道管敷設工事の障害にはなりえなかったし、モンスターがダンジョンから這い登ってくるというのは、街の住民のあらゆる年齢層の潜在的な恐怖ではあったが、闇の生物が心地よいダンジョンを離れて、わざわざ騒がしい都市へ上つて来たという証拠は一つとして存在しなかった。

エレベーター乗り場周辺の一角は企業組合からエレベーターボーイに任されていて、彼の家もそこにあった。

ビルの影となって乗り場は薄暗いが、ダンジョンから上がってきたばかりのエレベーターボーイにとってはそれでも十分すぎるほどの光度だ。

駄馬同様、いくら優秀なエレベーターであれ、ぶっ続けで走らせ続けるとつぶれてしまう。加えてエレベーターボーイの健康に対する闇の問題もあった。

そういうわけで、エレベーターボーイは自身を完璧にリラクセスの状態へと持っていていき、陽の光の差し込むスポットにおいた観葉植物にブリキのじょうろで水をやっている。鼻歌なども歌ってみるが、これは自身のエレベーターの籠が移動の際にたてる音を真似ているのだから、音楽の形にはなっていない。

ダンジョンの間は刺激的だし、エレベーターには中毒しているエレベーターボーイだが、こういう息抜きは必須だ。

だが、急にその顔はダンジョンの深みにいる時のように、険しいものとなった。

植物に異常があった。葉はしおれ、花は黒ずんでいる。毒をくらった冒険者のように病的な気配があった。

そして、少しずつだが、植物の具合は日々悪くなっているのに気付いている。

原因は？

エレベーターボーイはじろりと首をめぐらし、上方へと目をやった。

高架路線を、都市が消費するための石炭を満載した汽車が走っていく。その向こうでは、大型熱水紡績機を装備した工場から煙突が伸びていて、もうもうと粉塵や黒煙を吐いている。

自分の庭先でこの有様だ。

工場で働く労働者の肺の底には、植物を弱らせている空気中の塵がずっしりとたまっているという。治癒魔法さえ効果のない公害だ。モンスターに満ちた、地獄への入り口、ダンジョンでの冒険者としての生と、有害な空気の中、単調な作業に従事しながらゆっくり都市へ近づくと、どちらがまともな生き方と言えるのだろうか。

エレベーターボーイは庭の植物に目を戻した。

「……そのうちダンジョン産の植物を植えねばなくなるかもしれないな」

## 第九話 64階層（帰）

ジーツと呼び出しブザーが鳴って、表示板の針が64を指した。あの二人だ。トマト、キウリ関連の仕事を終えたらしい。

さらに何度もブザーは鳴る。

「何度も押さんでも聞こえているぞ」

エレベーターボーイはクランクを回しながら言った。だが、ブザーは止まない。あの二人は忍耐を知らないのか、さもなければ切羽詰まった状況にいるのだろう。

エレベーターが遅れたために冒険者が死ぬようなことがあつてはならない。断じて、あつてはならない。エレベーターボーイのプライドがかかっている。

エレベーターボーイは急いで手順を進め、エレベーターはそれに応えた。

エレベーターの籠はクロスボウから放たれた太矢のごときスピードでシャフトを駆け下りた。熱水機関から副産物として産まれた圧縮された空気を、エレベーターのすぐ上で解き放つたのだ。

落下の障害となるケーブルはすでに切り離してあつた。足下からの恐ろしい突風にエレベーターボーイはもみくちやにされる。体が浮き上がるのを防ぐために脚の指で床の突起を掴んでいる。

努力して目蓋をこじ開け、速力計を睨んだ。速力と時間さえ把握していれば、エレベーターの現在位置を割り出すのは造作もない。

エレベーターボーイは最小限のブレーキをかけた。人間の可聴域を超越した金属の絶叫が脳を貫く。常人ならそれに苦しみ、のたうち回ることだろう。だが、エレベーターボーイにとっては心地よい音色だ。狂気の流星のように時たま火花が散った。

エレベーターの籠は先ほどの横穴の地点に、先ほどの五倍のスピードでやって来た。

エレベーターの落下の方向が変わる。エレベーターボーイはよろ

めき、籠の壁の鋼材に頭をかち割られそうになる。だが、エレベーターボーイの太ももの筋肉が壺貝のように張り出し、彼は落ち着き払って姿勢を直した。

暗黒を切り裂いて、エレベーターの籠は64階層に飛び込んだ。状況が見て取れた。きらめく刀、モンスターのぬめつく表皮。

すでにエレベーターの籠の格子扉は開いている。

「乗るがよい！」

冒険者二人は、籠の中に駆け込み、モンスターも押し掛けて来た。ケラルムが振り向きざま、鋭剣を突いて、モンスターの皮から血がぶーっと吹き出し、床ではねた。

「エレネットを見せよ！」

エレベーターボーイが格子扉をどしんと閉めて、モンスターの首を挟んだ。ウツボと狼の合の子のようなモンスターが吠え、その頭は籠の外へと消えた。

「そんなもん、荷物の大半と一緒に奥に置いて来た！」

ケラルムが格子扉の隙間から刃を突き出しながら怒鳴る。

「無いのなら降りよ！」

「なんだって!？」

「こつちも商売でな！ただ乗りを許す余裕は無い！」

新手のモンスターが籠にずしんと頭突きをかまし、三人の足下が揺れた。

格子扉に穴が空いて、モンスターの顔がその向こうから押し寄せてくる。

「なんて野郎だ！ぶん殴ってやるから、そこで待ってる！」

「こういう国で、こういうダンジョンなのだ！」

ケラルムが忙しくモンスターを斬りながらいきり立った。その後でシフィエラが財布を開けると、エレベーターボーイに金貨を放った。

「地上行きの切符を二枚ね！」

「毎度あり。車内乗車券は普通の切符より高価だから、釣りは出ぬ

ぞ」

エレベーターの籠が動き出すと、モンスターは一層激しく籠を攻撃して、今にも格子扉は破られそうになった。

「シフィエラ、『インフェルノ』を使うんだ！」

ケラルムがモンスターを食い止めながら怒鳴った。シフィエラが腰から、なにか小さな陶器のようなものを掴んだ。ポーション回復薬かと思いきや、彼女はその先端の紐を引っ張り、格子扉の隙間から放り投げた。

直後、大爆発がダンジョンを揺さぶる。

地下深き64階層に新たな太陽が生まれでもしたかのような光と熱が広まった。モンスターの一団はその場で焼け死んだ。

エレベーターの籠は巨人に投げられでもしたかのように、めっちゃくちゃに跳ね回り、中の人間を多分に痛い目に遭わせる。だが、脱線だけはしなかったらしい。

エレベーターボーイが格子扉越しに外を睨むと、エレベーターの籠は追ってくる炎の壁を引き離しつつあった。

「いまのは魔法か？」

「いや、インフェルノは技術学部が作った爆薬の試験体だ。おまえ達が火筒に混めている黒い火薬よりも遥かに高性能で、点火するまで安定している。坑道の爆破を模して、ダンジョン内での使用を頼まれた。危うく焼き殺されるところだったがな」

ケラルムが答えた。

「でも、密閉空間での効果でしょうけど、あのサイズにしてはすごい爆発でしたよね。時計の機構を応用して、なんらかの時限点火装置を考案できるかもしれませんし、それなら爆発は離れた場所での安全なものとなりましょうね」

シフィエラが目を輝かせて言う。

二人はモンスターから逃げ延びて来た冒険者らしく、ぼろぼろの身なりで装備の大半を失っていた。それでも、トマトやキュウリをダンジョン奥深くに残してきたのだから、ダンジョン探索はある程



度成功したのだろう。

この二人が再び64階層に潜れば、トマトとキュウリ関連のなんらかのデータを手に入れ、それ相応の利益を得るはずだ。

だが、この二人にその度胸はあるか？ エレベーターボーイの経験は、野菜は64階層に放っておかれそうだと告げて来る。まあ、それはこの二人の問題だ。関わる必要もない。

その時、どすんと音がエレベーターの籠の天井でした。エレベーターボーイはダンジョンの天井の一角がはがれ落ちて来たことを頭に思い浮かべたが、さらに鍛冶職人が金属を叩く音が続いた。

籠の天井が火花を散らす。

「モンスターだ！ 天井の上におる！」

エレベーターボーイの警告が飛び、籠の天井の鋼鉄の板を、白いものが貫いた。ケラルムが血をまき散らして床に転がる。

天井から突き込まれたのは新月刀のように光る、ぎよつとするほど長いモンスターの爪だった。死を免れたモンスターの一匹が、エレベーターの籠の上にくつついて同族の復讐に燃えているのだ。

「ケレルム先輩！ あああ、どうしよう！」

シフイエラが頭を抱えた。彼女の先輩は肩を貫かれていた。すごい出血量だ。

「おぬし、プリーストだろう？ 回復の魔法はどうした？」

「魔法を発動するためのマジックポイントが足りなくてーああ、先輩！」

彼女の声は悲鳴になりつつあった。

まったく、素人というのは嫌なもんだ。一流の冒険者は、弓使いなら矢を、魔術師なら魔力をきらすと決めたことを決してしないものだ。

「回復ポーション一瓶を金貨一枚で販売してあるが、いかが？」

エレベーターボーイは相場の十倍の値段を口にしたが、金貨はすぐに飛んで来た。冒険者がこんなのはかりなら、エレベーターボーイの生活もずいぶん豊かになるうものだ。

エレベーターボーイは籠の片隅におかれた箱を開く。この箱はクーラーボックスと呼ばれていて、最近の熱力学の発達の賜物だ。箱の内部は人工的に安定な環境を保たれているので、エレベーターがダンジョンの過酷な環境を上り下りするにもかかわらず、質のいい様々なポーション薬が並んでいる。

シフィエラは購入したポーションの、赤いどろりとした液体をケラルムの傷口に注いだ。薬が折れた骨をつなぎ、裂けた肌を塞ぐ際の激痛で、ケラルムは歯を食いしばり、床に爪を食い込ませる。だが、ポーションの仕事は確実だ。数秒後には、冒険者は怪我をしたことなど、さつぱり忘れたかのように起き上がった。

さて、エレベーターボーイは頭上の脅威に対処せねばならない。モンスターは爪を何度も突き入れ、振り回していたが、しゃがんでさえいれば問題なかった。

だが、モンスターは籠の天井に大きな穴をあけて、籠の中に侵入しようとしてくる。モンスターの怪力で、天井の鋼鉄の板を留めるボルトがきしみはじめた。エレベーターボーイは速度計と刻時器を睨み、

「なにかに掴まれ！」

二人の客に怒鳴って、制御舵を握った。

エレベーターの籠は鋭く傾斜したレールを高速で駆け下りていたが、次の瞬間、唐突に垂直の落下に切り替わった。64階層からの横穴は終わり、地上へ通じる主シャフトにたどり着いたのだ。

普段ならスピードを徐々に落として、主シャフトのレールへと乗り換えるのだが、今はその暇も無かった。

二人の客が悲鳴を上げて籠の壁に叩き付けられる。そして、二人だけではなく、天井の上のモンスターも急激な進路の変化についていけず、慣性に従って直進し、主シャフトの岩の壁にぶつかった。さらに跳ね返り、反対側の壁にぶつかり、跳ね返ってその反対側の壁にぶつかった。そのことをエレベーターボーイは音で知った。

エレベーターボーイはレールが削れるほど、強力なブレーキをか

ける。その直後、突如停止したエレベーターの籠の天井に、回転しながらモンスターは激突してきた。

エレベーターの各所が苦しむような音をたて、煙を吐いていた。

「いまのは、流石のモンスターにもこたえたであろうよ」

エレベーターボーイは言った。

「なんて乗り物だ……」

ケラルムが弱々しく評価を口にした。

怒りの嵐をも压しただろう途轍もない騒音は、エレベーターの籠が停止するとともに失せ、今ではダンジョンのたてる低い音のみが辺りを支配していた。

エレベーターボーイは刻時器を指で叩く。かなり無茶な機動だったが、このエレベーターの籠はエレベーターボーイの芸術作品だ。この程度なら、まだ大きな不都合は起こりえない。

穴だらけになった籠の天井板からモンスターの血がぼたぼたと滴った。

「モンスターは死んだのか？」

「あるいはな」

エレベーターボーイは天井を睨んで言った。

エレベーターのケーブルは地表で切り離して来たが、今の振動でケーブル操作員たちはエレベーターボーイに気付いたはずだ。

エレベーターボーイのケーブル操作員たちは企業組合のなかでも最も訓練された連中で、レールやケーブルを伝わる振動や音でエレベーターボーイの意図を読み取ることができたし、逆にそれほど腕前を持たないものはエレベーターボーイの役には立たなかった。

エレベーターボーイはケーブルが来るまでこの地点で待っているだけでいいはずだ。

シフィエラが立ち上がるうとしたが、エレベーターボーイが素早く手で制した。

「どうやらまだ安全にはなっておらぬようだな」

三人の客は天井の上で、人間のものとは根源の異なる殺意のうね

りを感じた。モンスターが咆哮をあげた。なんと恐ろしき咆哮。それは籠の梁や壁を伝わって、エレベーターの乗客の骨と内蔵を揺さぶった。

モンスターが先ほどよりも怒り狂っているのは間違いないかった。

天井からやたらと爪が突き込まれ、モンスターは頭突きを繰り返す。

「64階層の連中の獰猛さには、げに特記すべきところがあるな。

主シャフトに来てなお、攻撃衝動をおさめぬとは」

「何とかならないか？」

ケラルムが剣を探りながら尋ねた。

「天井はもうもたないぞ」

「俺のエレベータの籠だぞ。まだもとうよ。それにー」

ゴツンっと三人の頭上で太い音がした。

「モンスターも大人しくなった」

籠の天井の穴からぼとぼと、モンスターの血が滴ったが、今回はそれに肉片が混じっていた。

「……何が起こった？」

「このエレベーターを地上まで引き上げてくれるケーブルが地表から下りて来たのだが、モンスターが立っていたところはケーブル接続機構の真上だったということだ。奴はそれに頭を砕かれおったよ  
うだな」

エレベーターボーイは大して興味も表さずに言い、数あるレバーの一つをのしかかるようにして引き下ろした。籠の天井部から四本の金属腕がケーブルをがちりと掴んだはずだ。

エレベーターボーイは籠の壁面をまさぐり、小窓を開いた。金槌を握った手をそこから出して、シャフトの壁面を走るレールを打った。特異なパターンの金属音が主シャフトを上がっていった。

「エレベーター動力室の連中に合図を送った」

エレベーターボーイは言った。音は遙か頭上の動力室までレールを伝わり、今頃労働者たちが走り回っていることだろう。

巨大な炉の高熱水蒸気が急激に冷却され、その負圧が車輪を回転

させるのだ。エレベーターの籠は引きずられるように上昇を始めた。エレベーターボーイは計器のチェックを怠らないが、なんの異常も無いようだった。

「すぐに地表に着く。くつろいどれ」

エレベーターボーイは座り込む二人にそう言い、それから天井へと目をやった。天井はひどく傷ついていた。これは板そのものを交換しなければならぬだろう。

しかも、エレベーターボーイの見ている前でぎしつと音をたてて天井の亀裂はさらに広がっていく。

「ん？」

天井板がめくれあがり、モンスターの顔がのぞいた。

つぶれて半分ほどの大きさになった顔で、残った一つの目が赤く燃えている。ノコギリの刃の形の歯を向いて、そいつは鋭い声を発した。

「なんとこの生命力。不死身か、こいつ？ おぬしら64階層のボスをあそこまで連れて来たのか？」

籠の天井部の重要機器がおさめられた梁はモンスターでも壊せはしないが、天井の板はもう駄目だ。

エレベーターボーイの傍らの冒険者は異国風の鞘からすらりと剣を抜いた。ケラルムは丁とモンスターのかぎ爪を切り払い、刃を天井に差し込んだ。血が雨のように降ってくる。

直後にエレベーターボーイの脚払いが彼を床に倒した。モンスターの両腕が寸前までケラルムのいた場所を薙ぐ。

「立ち上がるでない。ちよつと斬っただけで殺せる奴ではないぞ！」

「どうしろってんだ！」

「奴を食い止めるのに専念しろ。俺に手がある」

何本ものビスが外れる甲高い音がして、モンスターが奇怪な木の根にも見える上半身を籠の中に入れようとしてくる。ダンジョンの闇を見慣れたエレベーターボーイにさえ、それは途轍もないものに見えた。ぎよつとするほど大きい手から伸びた、攻撃の本性、かぎ

爪が襲いかかってくる。

ケラルムはうおつと叫んで、責め苦から逃れようとする子供がやるように、床を転がった。その横を床を削りながら爪がかすめる。シフィエラの錫杖がうなりを上げてモンスターを打つが、折れたのは彼女の得物の方だ。

エレベーターボーイはかがんで高度計と速度計を睨む。彼は戦闘に参加しない。彼にとって自分の体を使つての戦闘など専門外の上興味も無い。彼にとってはエレベーターがなによりも大切で、エレベーターもそれに応えてくれるのだ。

籠は上昇を続ける。いいスピードだ。エレベーターはこの上昇がここ数日で最高のスピードになっていることを肌で感じていた。

ケラルムが肩で転がりながら、剣を振るつたが、もともと籠は中で戦闘をすることを想定した広さが無かった。彼はモンスターの攻撃をかわけしきれずに、隅の方に積まれた緊急物資の山に突っ込んだ。シフィエラが投げナイフを放つが、モンスターの腕が翻つて、分厚い手のひらが金属の飛翔物を受け止める。モンスターの赤い目が嘲笑を浮かべるように光り、シフィエラが息を詰まらせるような声を上げた。

エレベーターボーイの見ている前で、計器の針は恐ろしい回転を続けた。籠の上昇のスピードはおよそ経験したことのないほどのものになりつつあった。階層を通過することに異なつた空気の層を突き破り、その際の音はどんどん鋭くなつていく。そして、階層ごとの異なつた色の光が、壊れた格子扉ごしに籠の中に差し込んだ。その間隔は短くなっていった。

モンスターの腕が、多くの頭をもつたへびを想像させる滑らかな動きで、床の上で目を回すケラルムに狙いを定める。

階層通過の音が、ついには連続した一つのものとなつた。

そして、突如として、壊れた格子扉の向こうから、光が瀑流となつて籠の中になだれ込む。全てがはつきりと浮かび上がり、人間の目はその光に焼かれるようで、目を開けていることすらできなくな

る。

エレベーターボーイの手が、制御盤の硝子に包まれた部位を貫き、その向こうのボタンを叩いた。

冒険者たちの命を狙っていたモンスターの腕はとどめを刺しにやってくることはなく、代わりに籠の天井の上で、まぎれもない悲鳴が上がった。

エレベーターシャフトの上でエレベーターに動力を与えている動力室。巨大な胃袋に見える熱水機関エンジンが、広大な部屋に熱と湿気をふりまいていた。この巨大機械の機嫌を損なわないように、劣悪な環境の中を労働者たちは走り回っていた。

そのとき、足下の床が破城槌で一撃でもされたかのように揺れて、誰もが尻餅をついた。

その上の階では、片眼鏡をかけて、書類を睨んでいた企業組合の会計士たちが椅子から転げ落ちた。

さらにその上の階で、お茶を飲みかわしながら異国の使者と商談を進めていた企業組合の専務たちが、茶器を振り回しながらぎゃつと叫んだ。

そういった具合にダンジョンの上に立っていた建物を大きな振動が襲った。

エレベーターの籠の、壊れた格子扉をどうにか開いてエレベーターボーイは地表のエレベーターの乗り場に下り立った。陽の光がいつものように、暗黒に慣れきったエレベーターボーイの目を貫いた。籠の中、天井からぶら下がるモンスターの腕は、光を浴びてしぼんでしまったかのように、力強さを失ってだらりとぶら下がっていた。モンスターの本体はもつと悲惨な状況にあることだろう。モンスターは今、主シャフトの天井と、エレベーターの籠の隙間の、指

先から肘ほどもない高さの空間に挟まれ、押し広げられているのだ。

籠の天井の穴から流れるモンスタアの血は止まる気配を見せず、おかげで二人の客はざぶざぶとその粘着質の水たまりを歩いて籠から出なければならなかった。

二人とも口をきくのも億劫そうだった。



## 第十話 エレベーターの次なる進化の予感。ダンジョン法的所有者

エレベーターの損傷はその性質上保険の対象とはなりえないため、企業組合からの特別手当の他はエレベーターボーイの自腹による修理となった。

とはいえ、大したことはない。いつかは起こりえた問題に対する解決法を購入したようなものだ。

天井板は取り替え、今回のことを教訓として対策を施すことにしよう。

エレベーターボーイの頭に冒険者が格子扉越しにモンスターを突き刺していた光景が蘇る。籠の中からの操作で天井板を突き破って飛び出す鋼鉄の杭なんて物がいいだろう。二腕長ほどの大きさの射出装置なら、蒸気力を借りずとも、バネの力のみで相当の威力を示すはずだ。

あるいは、それでも死なない頑強な奴に対しても、天井板から吹き飛ばして、奈落の底である100階層まで落としてしまえば、どんなモンスターであれ以後エレベーターを煩わすことはできなからう。

エレベーターボーイのエレベーターはどんな脅威に対しても柔軟に適応していかなければならなかった。

ダンジョン・マスターは髪に白いものが混じり始める年齢の男で、ダンジョンの深さに対抗するかのように、天空目がけて育っていく都市の中でも特に高い企業組合ビルの上階に構えていた。

その高さはそのまま彼の地位を表しているらしく、マスターはこのダンジョンの他にも六つのダンジョンを法的に所有し、企業組

合ダンジョン管理部を完璧に支配していた。企業組合の中での発言力も相当なものだろう。彼の階は難攻不落の上、大勢の警備兵に守られていることもこの推論を支持している。

所有する建物の階数が地位を表しているのならば、ダンジョンの100階層までを行き来するエレベーターボーイは企業組合に関係する人間の中でも、最も底辺に位置するはずだが、マスターは構わず笑顔でエレベーターボーイの肩を叩いた。

「先ほどの衝撃には驚いたぞ。あまりに恐ろしいモンスターから逃げていたのか？ それとも居眠りでもして地上についたのに気付かなかったか？」

こいつ、俺のことをその程度の人間とっておるのか、とエレベーターボーイは疑問に思うが、それはないはずだ。これはマスター風の挨拶というわけだ。

「好きに判断するがよい。それに俺のエレベーターはおぬしの仕事と直接関係しないではないか？」

「そうでもないのだ。私はダンジョン・マスター。ダンジョンで起きることは何であれ、ある程度は把握しておきたい」

マスターはそう言うと、巨大な窓の窓際に立ち、眼下の都市を眺めた。まるで窓税の存在などを無視した大きさの窓の向こうで、都市はぼやけて見える。

マスターはダンジョンの遙か上の椅子でふんぞり返っているだけで、ダンジョンとはどういうものか知りさえしないのではないかと多くの冒険者は想像する。にもかかわらず、ダンジョン・マスターなどというような大仰な名を名乗っているということは、マスターの常人離れた自信のなせる技だろうか。マスターの後ろ姿を見ながら、エレベーターボーイは考える。

「マスター、おぬし、エレベーターという言葉は異国からの由来と知っているか？」

エレベーターボーイが尋ねると、マスターは窓の外からエレベーターボーイへとゆっくりと目を移し、

「エレベートの第二文型所有依存格だ」

「ほう」

「私の理解はそうだったところにも及んでいる。ああ、そうだ。企業組合はダンジョンに対する理解を深めていかねばならない。そしていつかは完全な制御下に置くべきなのだ」

マスターは熱意を込めて言うが、エレベーターボーイは顔をしかめて首を振る。

「やめておけ。ダンジョンとは人間が簡単に扱える代物ではない。暗黒の世界だ。冒険者はダンジョンへと潜っていき、俺もそこで働いておるが、その実、分かっていることは実に少ない」

「別に今すぐダンジョンを制御できるとは考えていない。だが、だとしても、企業組合ダンジョン管理部が冒険者を統制するのは、それほどの難事ではなからう」

「冒険者を統制？　なんだそれは？　何をせんとしている？」

エレベーターボーイの疑問にマスターは答えず、低い声で、

「例えば、先日の92階層を制覇したギールとシャルナだが、この二人は企業組合にまるで敬意を払っておらん。ダンジョン管理部への冒険者登録費でさえ滞納が認められる」

突如、二人の冒険者の名が出て驚いたが、意外ではなかった。

望むままを行う、というのがあの二人の行動目標らしいのだから。おそらくあの二人の興味はダンジョンにのみ向けられていて、企業組合など眼中にないのだろう。

「ギールとシャルナに敬意を払ってもらうための助言が欲しいのか？」

エレベーターボーイは尋ねたが、マスターは今度も返事をしなかった。

「あの二人は以前、企業組合のやり方に反発した地方の団体に雇われ、企業組合に対する破壊工作に関わった疑いがある。そのときに我々が被った被害は、単一の破壊としては最大規模だったものだ。法に照らし合わせてみても、二人の罪は確実だ」

ありえない話ではなかった。

マスターは大きく息を吸い、肩が膨らんで一回り大きくなる。

「だが、都市の治安警察はどう考えているか分かるか？」

「いいや、俺は法律屋ではないからな」

「あの二人を捕らえようと、治安警官を差し向けた場合、警察側の被害は甚大になるうとのが予想したのだ。治安警察は採算が採れない限りは、二人が都市に迷惑をかけない以上、二人に手は出さないと抜かしてきたのだ！」

「だが、大抵の冒険者は、そういう風に雇われれば傭兵まがいの真似をするものだろうよ。ギールとシャルナに限った話でもあるまい」

「そうだ！ 二人だけではない！ 冒険者どもは皆、多かれ少なかれ、戦うための技術を習得している。そして、彼らは企業組合には全く敬意を払わないどころか、ときに敵対的ですからあります。企業組合は足下のダンジョンに、いつ暴れだすとも知れない無法者どもが溜まっているのを気に入っていない。これは我らを不安にしているのだ！」

「無茶苦茶な話に聞こえるぞ。冒険者なしでダンジョンをどうやって経営するのだ？」

「重要なのは、冒険者たちが企業組合に敵対してはならない、という話だ。そして、ギールとシャルナは最高の冒険者。冒険者たちの象徴。あの二人が企業組合に敵対しようと考えてはならんのだ！」

「おぬしが何を恐れているのであれ、杞憂だとは思うのだがな」

エレベーターボーイがエレベーターにしか興味がないように、あの二人は基本的にダンジョン以外に興味はあるまい。企業組合がどうこう騒いでも、煩わしがるだけだ。放っておけば、企業組合にとつては安全なはずなのだ。

「まあ、とにかく、企業組合は近いうちにダンジョン管理の改革に乗り出すつもりだ。おまえの力も大いに借りるつもりだぞ、エレベーターボーイ」

「改革か」

エレベーターボーイは不機嫌そうに吐き捨てた。

「冒険者たちはおまえたちがやることを喜ばんかもしれんな」

マスターは唇に薄く笑みを広げると言った。

「例え彼らが喜ばなくても、企業組合がダンジョンから十分に利益を回収することができれば私は満足なのだ」

## 第十一話 0階層

「私からの手紙は読んでくれたね、エレベーターボーイ？」

ホロンは久々に姿を表したかと思うと、こう尋ねた。

「シーフである私は、いつ死んでもおかしくないほど敵が多いのさ。だから、旅先で思いついたアイディアはすぐさま書き記して、手紙として送る事になっているんだけどー」

「かろうじて届いておったぞ。街の急成長のせいで郵便のみならず、数多の供給ラインがうまく機能しておらぬのだ」

「知ってるよ。私は国营の郵便なんてあてにしないさ。そいつを届けたのはフリーランスのクーリエ。国营の郵便は遅くて不確実な上に、常に検閲の可能性があるからね。そういえば、西方の都市でテレグラムとかいう何かが開発されたそうだけど、これが事態をいい方向へ向ける物なのかどうかは、まだ分からない」

ホロンは目を閉じて、海の向こうからの輸人品だとかいうおかしな茶を飲んでいる。エレベーターボーイの前にも器はあったが、用心深いこの男は手を付けない。

不用意におかしな物を食ったり飲んだりした後に、ダンジョンの闇の影響で腹の中の物が毒性を帯びたりしてはたまったものじゃない。真のダンジョンのエレベーターボーイはダンジョンの外でも油断をしないものだ。

「あれに書いてあった戯言は何だ？」

すでに原文は残っていない。蠟で書かれた文字は溶かして、紙は売り払ってしまった。街の、企業組合の勢力の及ばない闇市では、世間で出回るエスパルト草製の紙よりも上質なものなら一枚でもそれなりの値で売れるのだ。

しかし、文章はすっかりエレベーターボーイの脳に焼き付いている。

そこにあった単語は、エレベーターボーイギルド。

「エレベーターボーイギルドだ？ 一体なんだそれは？ 五百年前じゃあるまいし」

「エレベーターボーイという職業の特異性ゆえだよ。これからの時代、都市はさらに上へ下へと成長を続けるだろう。かといって、この中を馬や汽車で動き回るのにも限度がある。つまりは、エレベーターの黄金時代の到来というわけだ」

「本当の狙いは何だ？ 何がおぬしの利益になる、こそ泥？」

「単なる善意から来る親切と言いたいところなんだけどね……」

ホロンは笑ったが、エレベーターボーイがにこりともしないので、真顔に戻り、

「抑止力だよ」

「なんだそれは？」

「企業組合の力が大きくなりすぎている。今この国で、力を持っているのは王でも、貴族でも、国会でも、僧侶でもない。商人たちさ」

「莫迦を抜かすな」

「いや、エレベーターボーイ、ダンジョンに籠ってばかりいるあんたでももう感づいているはずだ。冒険者が見つけたダンジョンを、商人たちはいち早く商売道具にしまった。軍人は商人の利益のために戦ってるし、貴族の地位や爵位までもいまでは売り買いされてビジネスの一部となっている」

エレベーターボーイの見ている前で若いシーフは茶を口に運び、湯気がその顔をつかの間覆い隠した。

「奴らが全てを支配する前に私は奴らの弱点を探って抑止力としなくちゃいけないんだ。その点エレベーターというのは最適だ。エレベーターボーイ操作には高度な専門技術が必要な上、代用できる輸送方法は乏しい。都市の全てのエレベーターが止まれば、都市に巣食う商人はどれほどの損害を受けると思う？」

「なぜおぬしは商人を嫌う？」

この問いに対してホロンは短く一笑した。

「当然じゃないか、エレベーターボーイ？ 私はシーフだ。泥棒だ」

ぞ。商人とは正反対の生き物なんだ。シーフは気に食わない奴から盗むし、好きな奴には贈り物をする。商人が年中やつてる損得勘定なんて糞くらえだね。とにかく、私たちは黙って企業組合に駆逐されはしない」

彼はしかめ面のエレベーターボーイに笑って言って、立ち上がった。

「商人と私たちその敵対勢力が戦を始めた時、どちらにつくかはつきりと決めておくことだ、エレベーターボーイ」

ホロンはエレベーターボーイの部屋の入り口に敷いてある黒い絨毯に気付いてそれに魅入られたようだった。

「この家具、実にいいね。外国からの輸入品にはない闇の匂いがするよ」

「ダンジョン産家具第一号だ」

先日エレベーターで、はさまれてつぶされた64階層のモンスターの死骸だった。その黒い体毛はカラスの羽とも狼の毛とも異なつた手触りで、触る者の背に不思議に冷たいものをはしらせた。

絨毯になったモンスターはとうの昔に死んでいるはずなのだが、なぜかその顎が急に閉じて、ホロンの足に噛み付き、彼の靴に穴をあけた。

ホロンの言葉ごとくでエレベーターボーイはうろたえはしない。

シーフと商人の戦争だ？ そんなものは冒険者とモンスターの争い同様、くだらなく聞こえた。

商人とシーフ、どちらが正しいのかなんて分かりはしない。商人達の、富を所有する事を目的とした経済は、人間性の一部に思えたし、それに縛られるのを嫌うシーフの生き方にもうなずける。

だからといって、戦争に参加する気になるものでもあるまい。



だが、ホロンの残したエレベーターボーイギルドという名前のみ、不思議にエレベーターボーイの心に残った。

## 第十二話 シーフよりもたらされた驚くべき計画、その段階的進行

都市の主要上水道の一つ。

ここも都市の他のあらゆる場所同様に拡張が求められる場所で、地底湖のように広い空間のそこかしこで松明の炎が灯り、石工が上水道の壁面に注意深く新たな石を積み上げている。ここに大量の物資を運んでくるには船、トロツコ、そしてエレベーターが不可欠で、当然エレベーターが動き回るための装備も充実していた。

エレベーターボーイは通行量を払ってダンジョンの主シャフトから上水道へと自分の籠を入れた。籠は上水道の天井に敷かれたレールにぶら下がっていて、エレベーターボーイの両腕が、レールに沿って張られた鎖を引つ張って籠を前に進めている。

前方に他の籠が停まっていた。エレベーターボーイのものより小型で、だが、普通のエレベーターの籠にはない物々しきがある。壁面には銃眼までが開けられている、ダンジョンに属するエレベーターの物だ。

エレベーターボーイは自分の籠の速度を上手く調整したので、彼の鋼鉄の籠は羽毛が水面に浮かぶような静かさで、前方の籠に連結した。がらりと格子扉を開ける。

「やっほー、エレベーターボーイ」

前方の籠の主、D号ダンジョンの女エレベーターボーイ、エンチルが片手を上げて挨拶した。金髪を肩口で切りそろえ、ブルーマー姿の彼女は、エレベーターボーイという職業ならではの力強く、器用な四肢の持ち主だ。彼女と会うのは、先日のギールとシャルナの92階層制覇の際の、騒がしかった祝祭以来だった。

彼女は規模は小さいが油断ならないダンジョンを受け持っていて、ミスの少なさに関しては冒険者からも評判が高い。また、彼女は籠を、シャフトの中で横に回転させるとかいう不思議な特技も持って

いるらしい。

エレベーターボーイという職業は孤独な職業だが、彼らはプロ同士の敬意をもってして互いに接触を保っていた。

彼女の籠の中には彼女の弟子と思しき二人の若者が背を丸めてボードゲームに熱中していた。

「D号ダンジョン産アブサン、一杯どう？」

そう言っただけ彼女は何にやら黒い液体に満ちたグラスをエレベーターボーイに押し付ける。

「自家製か」

「もちろん。闇の味がきつ過ぎて外界の人間に飲める代物じゃないけどね」

「俺にとっても十分ひど過ぎる味なのだが」

少し口をつけてエレベーターボーイは言った。エンチルは笑う。

「貯蔵熟成したアルコールが安価に、大量に手に入った時代があったのは、今日の都市では想像するだに難しい」

エレベーターボーイはゆっくり戸棚にグラスを置いた。

「都市の異常成長を止めねばならんとは思わんか？ さもなくば、

いまの混乱が大した物とは思えぬ日が遠からずやってくるぞ」

「それは政治家とか企業組合の仕事じゃないかい？」

「連中は異常成長を止める気がなさそうだ」

「……何をたくらんでるのさ？」

エンチルの顔が鋭くなった。エレベーターボーイは奥の二人へ目をやり、声を低くした。

「エレベーターボーイギルドなる組織の設立の案をまとめておる。このギルドという名前は少し問題ありげだが」

「同業者組合？」

「いや、エレベーターボーイの間の結束を目に見える形にしたようなものを考えておる。商人たちは、企業組合を含めて皆、横のつながりを持っておるが、俺たちエレベーターボーイにはそれが無い。

個々に雇われ、ダンジョンの中では命さえかけているのに、尊敬さ

れることもない」

「確かに私たちの結束が提唱されたことはなかったわね。もしかしたら、面白いことになるかもしれない。でも、どうして、急にエレベーターボーイの職種全体の命運になんか興味を持ったの？」

エンチルが鋭く質問してきたのに対して、エレベーターボーイはかすかに笑みの残骸のようなものを顔に浮かべた。

「エレベーターボーイの職種全体の命運に興味を持っただけではない。俺たちが結託すれば企業組合をとめれうることに気付いたただけの話だ」

エンチルの表情がこわばった。

「そして多少なりとも、俺たちは都市の進みすぎた時計を巻き戻すことができよう。商人の勢いを弱めて、労働者を以前のように家に帰して生活できるようにしてやれる。その後、都市がより多くの人口に備えて正しい形に成長するのを待つのだ。今のままでは、都市はまったく秩序を見いだせぬ場所となる。ダンジョンと同じだ。ただ、住んでいるのが人間であるということの他はな」

「なんとまあ……」

エンチルは額に手を当てた。

「企業組合に対抗しようと言うのかい」

「奴らの力は強大だが、俺達エレベーターボーイは奴らに真似できぬことをやっている」

「そりゃそうだけどね……ふう。まったく……相手があんたじゃなけりゃ、こんな危険な話題から耳塞いでさっさと自分のシャフトに戻るんだけど。ちょっと考えさせてよ……」

エンチルはエレベーターボーイから目をそらして、口の中で何かぶつぶつつぶやきはじめた。真面目に考える時の癖だろう。

エレベーターボーイはコップをとり、黒い液体に口をつけた。ダンジョンの闇が、ひどい味とともに喉の奥へ下りていくのを感じて、ひやりとした。なるほど、こいつは刺激的だ。

だが、やはりエレベーターボーイは多くは飲まない。

「あまり長々と考えている暇はないかもしれぬぞ、エンチル。俺の勘は近いうちに何かが起こると告げておる」

「分かってるさ。この話、他に誰に言うつもりだい？」

エレベーターボーイは何人かの、信用できそうな名を上げた。

そこに含まれているのはダンジョンを職場とするエレベーターボーイたちだけで、普通のエレベーターボーイの名はなかった。

「普通のエレベーターボーイどもがどれほど味方になってくれるかはいまいち分からぬ。連中は我々ダンジョンのエレベーターボーイに軽蔑と尊敬の念を奇妙に合わせ持っておる。だが、普段から命がけで仕事をしていない奴がどう動くものか」

「そうだね。だとしたら、彼らはあるたと企業組合の、旗色のいい方につくんじゃないかな？」

「かもな」

「でも、ダンジョンのエレベーターボーイたちは違う」

エンチルはエレベーターボーイの目を見て、

「あんたがギルドを旗揚げすりゃ、無条件に参加する奴は少なくないはずだよ。なんたってあんたは最高のエレベーターボーイだ」

彼女は鋭く笑いかけた。

エレベーターボーイは、ショックを感じた。

自分はそれほどの、伝説的な人間となりつつあるというのか？

たしかにエレベーター操作に関しては他のどんな奴にだって負ける気はないし、自分の受け持つダンジョンが最高のダンジョンだろうことも知っている。

だが、自分がエレベーターを操っているのは自分の幸せのためだし、エレベーターボーイと名乗っているのも、他に名乗るべき名がなかっただけの理由からだ。

エンチルはエレベーターボーイの混乱を見るのを楽しんでいるようだったが、急にその顔から感情をかき消し、低い声で言う。

「全てはあんた次第だよ、エレベーターボーイ。全てはあんたが上手く始めるかどうかで決まるんだ」

「分かっておる。事が始める前に俺が消えては話にならぬ」  
「そして、忘れない事だ」

エンチルの声はダンジョンの物のように不吉に響く。

「エレベーターにはどうにもならない弱点があるって事を」  
エレベーターボーイはうなずく。

忘れるものか。

話をする相手は慎重に選ばねばならなかった。

企業組合が大きな利益を上げるダンジョンの中、利用者の冒険者の足であるエレベーターボーイが企業組合からの独立をたくらむのだ。十分に足下が固まる前に、エレベーターボーイの間の秘密結束手エレベーターボーイギルドが企業組合にばれるような事があつてはならない。

エンチルの後には、魔王の顎ダンジョンのジードや、7号ダンジョンの黄色いカステラのようなエレベーターの籠に乗るクロウラルに話して、双方から好意的な返答を得た。事が起こった後には、彼らは多いに頼りになる事だろう。

そして、焦りはエレベーター操作のとき同様、禁物だ。

遠方の腕利きエレベーターボーイには、直接会って説得というわけにはいかない。ホロンの真似をして、信用できる急使を探さねばならなかった。

### 第十三話 企業組合の知られていない目に見えぬ網。破滅の示唆

そんなときに、再びダンジョン・マスターがエレベーターボーイを呼び出してくる。

一体、今度は何だというのだ。

エレベーターボーイは忙しい人間であったし、企業組合に対する独立を考えている手前、マスターの前に出たくはなかった。

彼はエレベーターボーイの動作の微妙な差から、不審な空気を読み取ることなどできようか？ 常人にはまず無理だ。だが、マスターはただ者ではあるまい。

それでも、だとしても逃げるのは、なおまずいような気がする。何も気取られないように用心するしかない。

エレベーターボーイは紙を手に入れ、ミミズのたくるような字の報告書と不機嫌そのものの顔を作り上げると、ダンジョンの真上の企業組合ビルのエレベーターに乗った。

眠そうな若い男が運転するエレベーターの籠の中、エレベーターは左右にゆつくりと目を走らせた。

質素な作りだ。

思うに、マスターはより高級の自分専用のエレベーターを持っているのだろう。だとしたら、そのシャフトはビルのどこにあるのだろうか？ エレベーターボーイはビルの間取りを頭に浮かべ、プロの分析力でもって、予測する。

その間に、エレベーターの籠は最上階へとたどり着く。

「見る、エレベーターボーイ！ ここから街を見下ろしてみろ！」  
ダンジョン・マスターは開口一番にそう言うと、いつものようにエレベーターボーイの肩を叩きながら、彼を巨大な窓へと導いた。  
猥雑で、でこぼことした都市。人間の複雑さをそのまま表した、

最近流行のわけわからぬ芸術作品にさえ思えてくる。深い場所から都市を感じているエレベーターボーイにとって、このような高い場所から都市を見下ろす事は滅多になかったが、この光景は視覚的な醜さとなつて、エレベーターボーイの中に飛び込んでくる。

エレベーターボーイは隣にマスターがいることも忘れて、顔をひどくしかめてしまう。

だが、エレベーターボーイは地上では、大抵いつも、不機嫌そうな顔をしている。何も気取られる事はないはずだ。

「どうだ？ この都市は醜いだらう？」

マスターはエレベーターボーイの心を読みでもしたかのように言う。

「この醜さ、複雑さにこそ意味があるのだ、エレベーターボーイ」  
「なんだと？」

マスターは都市を撫でるかのように手を動かした。

「我々はどのように進化してきた？ 神に作られたなどという嘘はもう十分だ。我々は混沌とした苦境の中を生き抜くために弱き種から、強き人類へと歩んできたのだ。ああ、そうだ！ 複雑さにこそ意味があるのだ！ おまえもそう思うな、エレベーターボーイ！」  
「妙な戯言をやめろ、マスター！ 用件は何だ？」

エレベーターボーイが強い声で尋ねると、詩人のように語っていたマスターは、エレベーターボーイの顔を覗き込んでくる。

「原因療法さ」

マスターは懐から紙切れを出した。

「これにはダンジョン冒険者として登録されているシーフ、ホロンからエレベーターボーイへあてた手紙で、エレベーターボーイギルドなるものを設立し、企業組合への依存をやめる事を勧めている」  
「な……」

ホロンからの手紙？ なぜここに？

マスターは申し分程度に薄い唇を歪めて、笑いを作った。

「驚いたかね？ まだ世間に公開されていない新技術を使えば、消



えた文字すら再生させる事ができるのだよ。陰謀に対する技術の勝利という奴だ」

エレベーターボーイは何もいえなかった。

「複雑さがどうか言ったが、我々企業組合は所詮は商人の集まりだ。我々の目的はありとあらゆる富を手に入れ、そして、今持っている權益を守る事だ。幸いにして、法は我々の味方だ。企業組合に敵対する動きを見つけるための努力は惜しまないし、今回は闇市に光らせておいた私の目が、興味深いものを見つけたというわけだ。そして、我々は、我々にとつての、不利益となる、エレベーターボーイの、結束などというものを、許すわけにはいかんのだ！」

マスターは一言ずつ、区切るようにして言葉を吐いた。エレベーターボーイの肩に置かれた手の力は強まり、指が肌食い込んでくる痛みを感じる。

同時に、マスターの部屋の外、数人の剣士が待機していて、マスターが一声命じれば、エレベーターボーイを切り刻みに入ってくるだろう事も分かった。

「状況を理解したな？」

隣のマスターは笑みに残忍さを加え、そして、ゆっくりと扉の方を向いて、口を開いた。

エレベーターボーイは深々と息をつく。

そして、

「俺じゃない……」

「ん？」

「……マスターよ、なぜその手紙が俺と関係あると思った？ この街にエレベーターボーイなどいくらでもいるではないか」

しらばっくれるのが時間を稼ぐ役に立つかどうかは分からなかった。

「エレベーターボーイと名乗っているエレベーターボーイはおまえだけだ」

「くだらん。何の証拠にもなっておらぬぞ」

マスターの顔から笑みが引き下がり、その目が刃のように光る。エレベーターボーイはこのその場しのぎが上手くいった事を直感した。

企業組合は手紙は手に入れたが、エレベーターボーイが手紙を売った事までは確認できなかったのだ。

「嘘を弄するなよ、エレベーターボーイ。ホロンがおまえの知り合いだという事ぐらい分かっているんだ」

マスターはエレベーターボーイの嘘を見つけ出そうとしている。

心の動揺を探り出そうと、マスターの手が自分の中にまで入ってくるような錯覚さえした。

だが、無駄だ。

ちよつとした油断が死を招くエレベーター操作。それが求めるのは強固な精神だ。エレベーターボーイのエレベーターの籠がダンジョンで生き抜くために改造されていたのと同様の作用が、エレベーターボーイ本人にまで及んでいるのだ。

「知り合いでおかしくなろう。俺は最高のエレベーターボーイだし、ここは最高のダンジョンだ。常連にならんとする冒険者はつきぬのだ」

マスターはなおも睨みつけてきたが、エレベーターボーイは屈しなかった。

俺に参ったと言わせるのは、バケツでダンジョンを水没させようというのと同じく、簡単な事ではないぞ、と腹の内では思いながら、エレベーターボーイは仏頂面を返した。

マスターはエレベーターボーイがなんの動揺も見せない事を知る。「そうか……そうだな。おまえが我々企業組合を裏切るはずないよな。疑ったりして済まなかった」

マスターは友好的な笑みを作り、猫撫で声で言った。

「かまわぬよ」

「シーフのホロンが捕まれば事態は収まるのだし、そうすれば、不自然な騒動を考えるエレベーターボーイもおとなしくなるに違いな

い

「だろうな」

エレベーターボーイはマスターの手を払いのけ、持ってきた書類をマスターの机に放った。

「もう帰ってよいな。まだ俺のエレベーターの籠の調整が済んでおらぬのだ」

「ああ、そうしてくれたまえ。今日も大勢の冒険者がやってくるだろう。そして、92階層を制覇したギールとシャルナの二人組もダンジョンに来るそうだ」

「なんだと？」

マスターは猫撫で声を、つぶやき程度の声音に落とした。

「95階層でも、100階層でもどこでもいいが、二人が行きたい階層に連れて行ってやれ。そして二人を拾いにいくな。言ってる意味が分かるな？」

エレベーターボーイの目ははつきりと血走った。

「俺に人殺しをしると言うのか？」

「二人は企業組合にとって有害だ。二人はダンジョンに下りていき、二度と上がってこない。それだけだ。何も不自然なことではない。実に冒険者らしいあつさりとした最期だろう？ エレベーターボーイ、おまえは企業組合の味方だよな？」

エレベーターボーイは歯を食いしばり、何も返事をしない。ただ、ゆっくりと踵を返して、扉へと向かう。

「ああ、そうだ。エレベーターボーイ、おまえが我々を裏切るはずがないんだ。こんなに今まで我々につくして、ダンジョン産業をもり立ててくれたんだ。そして、裏切れるはずもないんだ。我々なしでおまえのエレベーターは満足に動かないのだからな」

エレベーターボーイは扉を抜けて、マスターの部屋をあとにした。廊下に人影はなかった。

ダンジョン・マスターは正しい。

企業組合の助けなしでエレベーターは動かない。エレベーターを完璧に操れるのがエレベーターボーイだけにしても、エレベーターを動かすには大勢の労働者、熱水機関、燃料と実に多くのものが必要だ。それら抜きだと、エレベーターの籠は重力の助けで下に下りることはできても、上へ上がることはできない、一方向的な代物と化してしまう。そんなものはもうエレベーターと呼べなかった。

エレベーターボーイは自室で低くうなつた。

俺はエレベーターが完璧に作動しているときに幸せだったのに。

日常は自分の技術の届かない面からの干渉で崩れようとしていた。

マスターが自分を生かして帰したのは、自分が最高のエレベーターボーイで、企業組合の利益をもたらすからだ。だが、ホロンが捕まるなり、エレベーターギルドに関するなにかが露呈すれば、それまでだ。

企業組合が自分を殺すのには短刀さえ必要ない。ダンジョンの深みに籠があるときに、熱水機関を止められてしまえば、もうダンジョンの闇の中で朽ち果てる他なくなる。

どんな人間とて垂直の主シャフトを登ってくるだなんて芸当はできないだろう。

そして、ギールとシャルナの殺害の命令。マスターの意図は読めた。

企業組合がエレベーターボーイを殺せば、二人はこのダンジョンへの興味をよそに移して、企業組合の手の届かない所へ去ってしまうかもしれない。その前に確実に二人を葬ってしまおうというのだ。エレベーターボーイは、エレベーターの籠の床が抜けて、自分が奈落の底へ堕ちていく気分を感じていた。

冒険者とモンスターの戦いに関わらずにいたように、商人とシーフの戦いにも近づけずに入れると思っていた。だが、問題はあち

らから勝手に迫ってきてしまった。

そして、自分のエレベーターの客の命を奪えと命じられている。全てを捨てて逃げ出すという考えは、現実味を持たなく感じた。

このエレベーターを捨てて、どこへ逃げようというのだ？ それをすれば、企業組合に殺されるよりも惨めな事になるに違い。

エレベーターボーイの選ぶことのできる選択肢は少なかった。

## 第十四話 7階層

しばらくすると、ボンダーがダンジョンにやって来た。

エレベーターの籠はダンジョンの7階層に停まり、二人の男が薄明かりの下、七輪を囲んでタマネギを焼いている。

「無愛想なおまえから食事の招待とは、珍しい事だな」

ボンダーはそう言って、タマネギを剥く。

エレベーターボーイの口数は少なかった。

「しかし、このダンジョン産タマネギの味にも飽きてきたぞ。豆は育つのにまだ時間はかかるだろうし。まったく、この街はわしを飢え死にさせるつもりか!? 店屋の棚は十日も前から空のままだぞ！ ウオオオオ！」

ボンダーは怒る。

だが、エレベーターボーイは暗い声でぼそりと、

「俺が死んだあとは、いかような者がこのダンジョンを任せられるのだろうか？」

「なんだと!？」

大男の怒りは消し飛んだ。

「並のエレベーターボーイに百の階層は無理だ。だとすると、挑戦者の少ない階層は閉鎖されていくのだろうか……」

「おいおい、何を言ってるんだ！ おまえほどのエレベーターボーイが簡単に死んでたまるか！ 死ぬ事は許さんぞ！ わしがいつか100階層を制覇するときに、そこまで下ろしてくれるのは誰だと思ってるんだ！」

大男は騒ぎ、籠が揺れた。

ボンダーが勝手にライバルと決めている、ギールとシャルナがダンジョンから帰ってこなければ、この男はどう反応するだろうか。エレベーターボーイは想像した。ライバルを消えた事を喜ぶよりも、二人が唐突に消えた事に対する怒りで、全体力を使ってしまうのだ

ろう。彼はそういう男だ。

「おまえは疲れているのだ、エレベーターボーイ。少し休暇をいれてみる。今日の午後には東方の帝国から来ていた交易船団が帰国のために出港するらしい。きつと見物だぞ。行って見てくりゃいい」

「東方の帝国からの交易船団？」

「そうだ。だが、わたしには遊んでいる暇などない！一刻も早くレベルを上げねば！100階層を最初に制覇するのはギールでもシヤルナでも他の誰かでもない！このわしだ！ウオオオ！」

ボンダーは興奮して長斧を振り回した。

エレベーターボーイはそれを無視して、七輪の火を見つめた。一分ほども難しい顔をしていただろうか。

やがて、顔を上げた。

「ボンダー、おぬし向きの階層があるぞ。ダンジョン産農作物と、手強いモンスター双方がそろった階層だ」

## 第十五話 ダンジョンの興味深い産物。異国人への新たな契約提案

港では五十隻もの朱塗りの木造ジャンクが出港準備の最終チェックを終えようとしていた。

船のマストの頂きではためくのは帝国の旗印。威風堂々たる船団を見て、人々が目を丸くするのがよく分かる。ケラルムがにっこり笑みを浮かべた。

旗船からシフィエラが棧橋へと下りてくる。

「出港準備完了ですね、ケラルム先輩」

「十全だ、シフィエラ。なんなら、今からケラルム船団長と呼んでくれてもいい」

ケラルムは港の向こう、都市の方へと目をやった。都市は自ら産み出す排煙の幕に包まれてぼやけ、なにかこの世には実在しない物のように見える。

「……興味深い国だった。不思議な事と理不尽な事に満ちてもいたが、それでも、機会あればまたいつか来てみたい国だ。この国がこれからどう変わっていくかにも興味がある」

「私たちがこの国で手に入れた知識の数々や品々に、陛下もお喜びになるでしょうね」

「ああ、間違いない。全てがうまくいったわけではないが、それでも得た収穫は莫大だ」

ケラルムとシフィエラは都市に背を向けると、帰路につくための航海へと歩き出す。ケラルムがジャンクへの渡し板に足をかけた。

「おぬしらのダンジョン探索も完全なものにしておかぬか？」

突然低い声が地の底か、海の底から響いてきて、二人の肝がでんぐり返った。

埠頭の地面の一部がもりもりと盛り上がる。その下から現れたのは二人が乗ったことのあるエレベーターの籠だった。

「ダンジョンのエレベーターボーイ！」



「港のエレベーターボーイどもはずいぶん高い通行量を求めおったわ」

エレベーターボーイは陽光と水面の輝きに顔をしかめながら、樽を一つ、籠から担ぎだした。籠の中には同様の樽がいくつも並んでいる。

二人が駆け寄ってくると、エレベーターボーイは樽の蓋を開けてみせた。

「これは……一体なんだ？」

「おぬしらが64階層に植えたトマトだのキュウリだのに決まってるっ」

樽は珍妙な物体であふれていた。

黒い螺旋形キュウリ、車輪形トマト、無数の触手を生やしたセオリ、あるいはそれより奇抜な外見で、上手く言葉に表す事もできないだろう数々。

「ダンジョンの闇はこれらに歪んだ成長をもたらしたようだ。その形に法則性は見られぬ」

「わざわざ採ってきてくれたのか？」

「俺のダンジョンにやたらと野菜が増えるのも困るのでな」

シフィエラが野菜の一つを取り出し、匂いを嗅いで、おそろおそろかじってみる。直後にひどく咳き込んで、地面に手をついた。

「ダンジョン産タマネギを日常的に食べている男は、それを気に入っておったがな」

エレベーターボーイは言った。ケラルムは樽の中の不気味な野菜類を眺め、

「……シフィエラ、どうする？ 持って帰るべきだと思うか？」

シフィエラは目を輝かせて、元気よく身を起こした。

「当然ですね、先輩！ これほどユニークな突然変異体！ これらをいま私たちが食べている物とかけ合わせることができれば、より多様な品種が手に入ります。品種の多さは冷害や虫害に対する、生存力に直結しますからね」

ケラルムは肩をすくめた。

「分かったよ。これが我が国を度々襲う大飢饉と、それに伴う大量死を止める役に立つてくれればいいのだがな。全部もらうていこう。いくら払えばいい？」

エレベーターボーイは首を振った。

「金貨はいらぬよ。代わりにゆずってほしい物がある」

## 第十六話 階層超越（行）

ダンジョンの主シャフトをエレベーターの籠はゆっくりと下っていく。

だが、それでもエレベーターボーイの目は真剣そのものだった。籠の位置がどこであれ、スピードがどうであれ、籠が動いている限り決して気を抜くことはない。

客は二人。

最高の冒険者、ギールとシャルナだった。

エレベーターボーイは籠を10階層にゆっくりと停める。そして、二人の客の方を向いた。

ダンジョンという世界のどの環境とも異質な戦場をくぐり抜けてきた二人組。だが、彼らとて、エレベーターボーイがエレベーターで拾いに来なければ、ダンジョンの奥底で朽ち果てる羽目になる。結局、このダンジョンで人間が行きっていくのに必要なのは信頼だった。それさえあれば、個々の技能の限界は補え合えよう。

いや、これはダンジョンの中だけに限った話ではないかもしれない。い。

企業組合はこの点を軽んじるべきではなかったのだ。

「さて、これからやるのは俺とてまだ試したことのない技だ。上手くいくかどうかは、分からぬが、かまわぬな？」

エレベーターはそう言った。

ブレーキをかけ、ケーブルを切断した。これでエレベーターに対する熱水機関の支配もなくなった。

「刺激的なことは大歓迎さ」

シャルナが答えた。ギールも隣でうなずく。よかるう。

エレベーターボーイは床にひかれたロープを手に取った。

ダンジョンのモンスターののように、激しく、容赦なく、慈悲もな

き一撃が必要なのだ。

エレベーターボーイはロープを力一杯引いた。

エレベーターの籠の下に設置されていたのはケラルムから入手した、数個のインフェルノという爆薬だった。それが一斉に起爆する。

64階層でエレベーターの籠をひどく揺さぶったのと同じ衝撃波が生まれたが、今回、その力はエレベーターの床にもろにぶつかり、それを押し上げる。二人の冒険者のみならず、思わずエレベーターボーイも息をこらえた。

ケーブルの最大巻き上げの力を軽く凌駕する、爆発の力。

エレベーターボーイは脊髄を圧縮される痛みに貫かれ、さらに体中の血が足まで押し下げられるのを感じる。

俺のエレベーターがこれほどの力をまとおうとは！

激しい苦痛、経験したことのない上昇の中でさえ、エレベーターボーイの腕にいささかの衰えもない。籠はダンジョンの主シャフトから横穴の一つに飛び込み、さらにそのシャフトも駆け上った。エレベーターボーイが目指したのは、企業組合のビルのエレベーターシャフトだ。

シャフトには門もなければ、門番もない。必要ないからだ。

垂直のシャフトをよじ上れる者などいないし、許された籠以外は、ケーブルを巻き上げてもらえない。

不法に他人のビルに侵入できる者がいるとすれば……それは自力でシャフトを駆け上れるエレベーターの籠を持つ者だけだった。

エレベーターボーイの籠の上昇のスピードはなおも落ちない。シャフトを塞ぐ形で、企業組合のエレベーターの籠が停まっていた。だが、格が違う。エレベーターボーイの籠がぶつかると、それは簡単に弾き飛ばされ、粉々になってしまう。

エレベーターボーイは目的とする高度を知っていた。ブレーキが叫び、籠が急停止する。

企業組合のビル最上階、ダンジョン・マスターの階だ。

格子扉ががりりと開いた。

驚いた顔を浮かべて警備員が飛んでくる。だが、逆に二つの影が彼らに飛びかかった。

「敵襲だ！」

「馬鹿な！　ありえん！」

悲鳴を聞きつけ、さらに多くの警備員が集まってくるが、すでに部屋は修羅場となりつつあった。

このビルにおよそ似合わぬ見た目の鎧姿二人が、大暴れしている。しかも、その動きは信じがたいほど能率的だ。

警備員は文字通り片端から倒され、死体が床を埋め始める。

「ええい、射倒してしまえい！」

警備員が叫び、奥から火筒やクロスボウを構えて飛び出してきた。だが、引き金を引く暇さえ与えられない。シャルナの投げた曲刀がうなりを上げて襲いかかった。血を吹きながら射手がばたばたと倒れる中、曲刀は意思を持つかのように持ち主の手の中に戻っていく。

ギールの大剣はより恐ろしかった。ぶんぶん振り回されるのではない。残像を残すスピードですらない。まったく目視が不可能な速さだった。

大剣が振られると、空気すら両断された。斬られた警備員は血まみれの肉塊になって壁や天井に叩き付けられる。

これが最高のダンジョンの92階層制覇の腕だった。

警備員たちは潮がひくように後退した。

「んー手応えないねえ。ダンジョンの真上に住んでいるのだから、もっと楽しませてくれると思ったのに」

シャルナが曲刀を逆手に持ち替えなが言う。

「仕方ないだろう。まともな人間はあんな暗くて怖い場所には下りて行きはしない。……行くのはなかば正気を失った我々のような人種だけさ」

ギールが言いながら、斬り掛かってきた警備員の切っ先を受け流し、擬攻を仕掛けて相手の防備を崩すと、直後に敵の首を切り落と

した。

「……代わりにダンジョンは我々を強くしたが」

ギールは返り血を拭いながら言った。

警備員に魔術師が混じっているようで、呪文を高らかに詠唱する声が入垣の向こうから聞こえた。

シャルナはふっと一笑すると、掌から火球を放った。詠唱もなしでの魔法だ。

炎の壁が警備員詰所を吹き飛ばす。

ギールがダンジョン・マスターの部屋の扉を蹴り開けた。マスターが、彼の執務机から立ち上がった。

「企業組合のダンジョン・マスター。おまえに似合いの死を届けにきたぞ」

ギールは小声ながら、遠くまで聞こえる氷のような声を発した。

マスターは、激怒の怒鳴り声を上げると、雷のように身をひるがえし、彼の部屋の反対側の扉から姿を消した。

思わずギールも驚く、見事な逃げっぷりだ。

その素早さはモンスターに追われ、ダンジョンから逃げる冒険者に勝るものがある。

ギールとシャルナは新たに沸き出してきた警備員を相手にせねばならなかった。

## 第十七話 階層超越（帰）

マスターは怒り狂いながらも、しっかりと作りの自分のエレベーターに飛び込んだ。そのエレベーターのエレベーターボーイはこの騒動にも関わらず、うずくまって籠の骨格を工具で調整していた。「早く出せ！」

マスターの服は乱れ、手には廊下の壁に飾ってあった長剣をひつつかんでいる。その顔にダンジョンの持ち主の落ち着きは見えない。「企業組合の傭兵集合地へやるんだ！あの二人を、生かしてこのビルから出しはしないぞ」

籠は急降下を始め、マスターは満足した。

いくら一流の冒険者といえども、荒事に慣れた企業組合の傭兵の前にすれば、長くは生きられまい。これまでの、企業組合の敵対者と同じ運命をたどることになるのだ。

「おぬしのエレベーターはこんなものか」

エレベーターを操っていた男がゆっくりと振り向いた。マスターはわっと叫んだ。

ダンジョンのエレベーターボーイだった。その細いが、硬い身体を制御装置にもたせかけている。傷だらけの顔に、敵意の混じった仏頂面を浮かべているが、その顔はエレベーターの暗い籠の中では、底知れぬ力を秘めているように感じる。

「悪くない作りだが、商人のおぬらしい構造だ。まっこと、エレベーターの形は持ち主を表すものよ」

「そうか、貴様の仕業か、あの二人を私の階に導いたのも。一体どうやった？」

「なに、大したことはない」

エレベーターボーイは小刻みにハンドルを回し、籠は落下のスピードを増していく。

「異質のジャンルが融合して奇抜なアイディアが生まれたに過ぎぬ

よ。火薬で弾丸を飛ばすより、エレベーターの籠を放り上げる方が平和的とも思わぬか？」

「貴様は大した男だ。貴様のような男を失うのが、どれほど企業組合の損失となるのか分かるか？」

「どうだかな」

エレベーターボーイは喉の奥で笑った。

籠は一瞬、落下のベクトルを変え、そして異なる空気層に飛び込んだ。

「ここは、ダンジョンのシャフトだ。己のダンジョンに初めて入って、どんな気持ちだ、マスター？」

マスターは目を血走らせて、手に持っていた長剣をゆっくりと鞘から抜いた。

「貴様の護身用の武器が見えんな、エレベーターボーイ？」

「なぜ、そんなものが必要なのだ？ 刃物というのはエレベーターボーイの仕事の道具ではないぞ」

「だとすれば、貴様はその考えの甘さを改める必要があるそうだな。今すぐエレベーターを止める」

急降下の凄まじい風圧にも関わらず、マスターは長剣を構えた。

放つ殺気は血に飢えた冒険者の物のように鋭い。

エレベーターボーイは舌を巻く。

商人にしてこれほどの闘気とは。マスターもまったく、大した男だ。

「俺を斬り殺せば、エレベーターは停まらぬぞ」

「どうかな？ 私はダンジョン・マスター。ダンジョンのことに關しては、全てのことを多少なりとも知っている。エレベーターの操作でさえ、例外ではないぞ」

「ダンジョンに入りもせず、上でふんぞり返っていただけなのに、ようぼやく」

エレベーターボーイは計器をちらりと見た。

「最後に言っておくと、俺が乗客を殺すのは、後にも先にもこれ一



回きり。殺すのもおぬし一人だ。さらばだ、マスター」

「うおお！」

マスターは怒号を発し、斬り掛かってきた。

エレベーターボーイは、素早くレバーの一つを倒した。マスターがこの籠に乗ってくるまでに、籠の骨格の結合部を絶妙な具合に弱めておいた。それが、この衝撃で震え、弾け飛ぶのだ。

床が無くなった。

斬り掛かってきたマスターはそのままの姿勢で落ちていく。奈落の底目がけ、怒声を引きずりながら、たちまち見えなくなった。

エレベーターボーイは制御機器にぶら下がっていたが、数秒後にマスターと同じ道をたどった。骨格が砕けた籠はもう単一の乗り物として存在できず、数多の金属片となって、ばらばらとシャフトを落下しはじめた。

エレベーターボーイの隣を、籠の天井板や、梁、無数の歯車やバネ、ワイヤーが追い抜いていく。エレベーターボーイにとって自由落下はなじみ深い物だったが、自分を包む籠がないことが、彼をなによりも不安にさせた。

エレベーターは彼なしでは動かない。

それゆえにエレベーターはエレベーターボーイは見捨てないはずだった。

恐ろしい落下の風圧に、エレベーターボーイの目蓋や唇はめくれあがり、服が体を締め付けた。

いよいよ暗さはその深みを増し、彼の体は大地の奥底でうめきを発する地獄へと到達するかと思われる。

その寸前、エレベーターボーイは耳に親しんだ、金属の悲鳴を聞いた。エレベーターボーイは努力して、どうにか笑顔らしき顔を顔に浮かべる。

手を上へと伸ばすと、自分を追うように急降下してくる金属の塊に触れた。

彼のエレベーターの籠だった。

エレベーターボーイは息を詰め、腕の力だけで籠の壁面まで這っていき、格子扉を開けて、自分の籠に自分の身を収めた。ブレーキの音がダンジョンの空気をつんざいた。

籠は停止したが、それからしばらくエレベーターボーイは肩で息をしていた。高度計に目をやると、まさに望んだ通りの位置だった。マスターの階にギールとシャルナが斬り込んだ後、エレベーターボーイは自分の籠に複雑な操作を行った。それにより、彼の籠は最初はゆっくりと、だが、ダンジョンのシャフトに入った後は徐々に落下のスピードを上げるように命じられ、無人でマスターの階を離れていった。

エレベーターボーイはそれからマスターのエレベーターを探した。あのマスターに勝つには彼を自分の土俵に連れ込むしかなかった。ギールとシャルナの大暴れのおかげで、エレベーターボーイは誰にも見とがめられずにマスターのエレベータを見つけ、工作を行うことができた。

すべては絶妙なタイミングが可能とした成功だった。

だが、まだ終わりではない。エレベーターボーイは籠の中に積みれたクーラーボックスから、急いで新たなインフェルノの壺をいくつかとった。これを籠に装備して、再びマスターの階に上がり、ギールとシャルナを拾ってこなければならぬ。

エレベーターが遅れたために冒険者が死ぬようなことがあってはならない。断じて、あってはならないのだ。

## 第十八話 一連の事件の顛末と、新局面を迎えようとしている社会

事件の真相が明るみになることはないだろう。

ダンジョン・マスターは難攻不落であるはずの自分の階から忽然と消え、彼の階の警備員は全滅していた。これほど奇怪な事件は現代であつても希なはずだ。

街では、ついにダンジョンのモンスターがシャフトをよじ上る方法を見つけ、人の世界を制圧する手始めとしてマスターを消滅させたか、誘拐したのだらう、などといった仮説が飛び回り、大衆紙も好き勝手なことを書いた。

そして、企業組合の追及の手は伸びてこなかった。

マスターが消えたすぐ後に、商人の敵は戦いを始めた。混乱は増し、死人も増えていった。シーフやその味方は自分たちを『解放者』と名付け、その実体は明らかになつていなかった。噂によると、解放者の掠奪船が企業組合の商船団を壊滅させたとのことだが、なんにせよ、企業組合はその対処に追われ、ダンジョンにかまつてなどいられなくなつた。

マスターの地位を引き継いだ者は、ダンジョンを今まで通り運営することを目的とし、冒険者やエレベーターボーイの前に姿を現しさえしなかった。

解放者たちの中の水ロンが、企業組合の疑いの目をエレベーターボーイからそらすために活動を行ったのなら、それは功を奏したことになるし、おそらくはしたのだらう。ホロンの不手際に対する償いか、それとも、それさえもホロンのプランの一部で、マスターという企業組合の一角を崩すための道具としてエレベーターボーイを使ったのか。

これも明らかにはならぬことだつた。

エレベーターギルド設立が近づくにつれ、多忙になることは分かっている。だが、それでもエレベーターボーイは可能な限り、彼の

エレベーターに冒険者を乗せてシャフトを駆け下りていくことだろ  
う。

ダンジョンの底を目指して。

## 第十九話 100階層

空気という空気が陰をうちに込め、ざらつく床の敷石には千年にも渡る、捨てられたあらゆるものが積もって山をなし、恨めしげにすすり泣いているようにさえ見えた。所々で燃える火も見えようが、それも悪意の燃えるような黒い炎。

この広い会堂の奥底からの正体の知れぬ轟音が途切れることはま  
ずなく、瘡蓋のような石に覆われた壁も常に細かく震えていた。

だが、轟音が世界を振るわすには、この場所は世界からあまりに  
遠く離れていた。

やがて、暗闇の中に積もった汚らわしい山が崩れた。そこからよ  
るめきつつ歩み出たのは幽鬼に見える人間。そう見えても、なんら  
おかしくないほど、その男は今にも死なんとしている外見だった。

朽ちた襤褸のような体を引きずり、しかし、それも三歩となし得  
ず、男は立ちこめる闇の中、ひざまずくかのように崩れた。男の、  
骸骨のようになった手が伸ばされた先には、耐え難いほど威圧的な  
100という数字が描かれていた。

男はその強大な存在から逃れようと、傍らに立つ石碑へと這い寄  
り、後ろに隠れようとす。

その石碑の上にあるのは、エレベーター呼び出しボタン。

それを見ると、男はその身から判別するには、信じがたい力を呼  
び覚まし、自力で立ち上がると、どうにかして腰から剣の残骸を引  
き抜いた。

石碑へと剣の狙いを定める。

男が喉から大音声を発した。

それが怒りの一声だったのか、嫺々とした悲痛の声だったのか、  
世が知ることはかなわない。

ダンジョンの無限の、複雑な胸楼を登る間に、声はねじ曲げられ、  
そして消えていった。

そして、100階層のモンスターたちはゆっくりと目蓋を開いた。

第十九話 100階層（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2512j/>

---

ダンジョンのエレベーターボーイ

2010年10月8日12時46分発行